

2019年8月1日

みずほディーラーズアイ (2019年8月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 107.50 ~ 110.00

市場営業部 為替営業第二チーム 関 浩士

■ 先月の為替相場

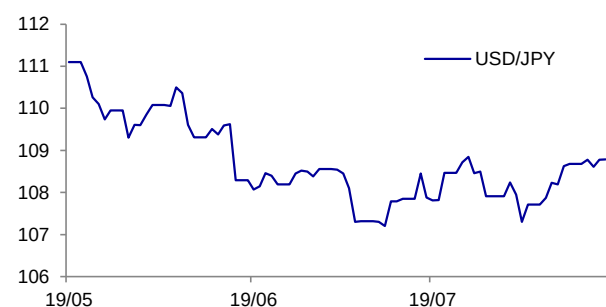
月初に米中通商協議の再開合意、対中関税第四弾先送り、ファーウェイ制裁の一部緩和が好感され窓を開けてオープンしたドル円は、108.53円まで上昇。翌2日、米USTRがEU製品40億ドル相当へ追加関税を提案したとの報道を受け108.30円割れまで下落すると、ハト派なBOEを受けたボンド円の売りに加え、プーチン露大統領が露国防相と緊急会談の報道にリスクオフムードが強まると108円を割り込み、3日にかけて107.54円まで下落した。米休場明け5日、米6月雇用統計は、非農業部門雇用者数が市場予想を大幅に上回り、米金利が上げ幅を拡大すると108.64円を示現し、10日には月間高値となる108.99円をつけたが、パウエルFRB議長の議会証言がハト派な内容であったほか、FOMC 議事要旨においても多くのメンバーがより強い利下げの根拠を認識したことが明らかになると108円台前半まで急落した。11日、イラン籍船舶がホルムズ海峡で英タンカーに接近したとの報道を受けて地政学リスクが意識されると、107.86 円まで値を下げたが、15日には中国第2四半期GDPや6月鉱工業生産の良好な結果を受け108円台前半まで戻した。16日には、良好な米6月小売売上高の結果を受け、108円台前半にて底堅い推移となったが、18日にクラリダFRB 副議長やウィリアムズNY連銀総裁のハト派的な発言をきっかけに米金利が低下すると、ドル円は月間安値の107.21円まで値を下げ、その後火消し発言が出る中、19日にかけて107円台半ばまで値を戻した。米紙が「Fed要人は今月末の会合は0.25%の利下げのサインを送っている」と報じたことから、0.5%利下げ期待が後退し、107.97円まで上昇し、23日にIMFの世界経済見通しにおいて米国の成長率見通しが上方修正されると、ドル円は108円台前半まで強含んだ。翌24日に米6月新築住宅販売件数の市場予想を下回る結果にドル売りが強まると、107円台後半まで下落したが、25日にECB 政策理事会にて市場予想通りの金利据え置きとなるも、期待ほどハト派な内容でなかったことでユーロ円が上昇するとドル円も連れ高となり、108円台後半まで上昇した。26日に当面の為替介入の可能性を却下したとの米政府高官による発言等に後押しされ108.83円まで上昇し、29日にはロンドンフィックスにかけハードブレグジット懸念も相俟ったユーロポンド上昇の動きにドル円も連れ高となると108.90円まで上昇した。30日、日銀政策決定会合にて、追加金融緩和期待に108.95円まで上昇する場面も見られたが、フォワードガイダンスに変更無しと伝わると、108.46円まで値を下げた。31日はFOMCを控え108円半ばでの小幅な推移となっている。

■ 今月の見通し

今月のドル円は底堅い推移を予想する。
世界経済の減速を背景に、主要中央銀行は金融緩和に舵を切り始めた。米国は31日のFOMCにて利下げを開始する見込みであり、欧州中央銀行は先月25日の政策委員会後、少なくとも20年上期中は金利が現行またはそれ以下の水準に留まると表明し、ユーロ圏経済を支えるための金融緩和を夏季休暇後に拡大すると強く示唆した。一方、先月30日の日銀の金融政策決定会合では、「少なくとも20年春ごろ」まで現在の超低金利を維持するとのフォワードガイダンスは維持され、日銀に対する事前の緩和期待がさほど高かったわけではないものの、利下げが見込まれている米国との金融緩和姿勢の格差が意識され、円買い優勢な展開となった。
注目される7月のFOMCでは25bpの利下げ幅という見方が確度の高い状況であるが、足許、市場が2021年3月までに25bp利下げを4回織り込んでいる状況であり、年内に織り込む利下げ幅に限ればおよそ60bp程度となっている。一度の利下げ幅を25bpと仮定すれば、回数にして2.4 回程度となっている。パウエル議長の記者会見後、利下げの織り込みが後退する内容となれば、ドル円のサポート材料になるとみておきたい。米国10年債とFF金利で長短金利の逆転が起きているが、25bpの利下げではその解消は当然出ず、景気拡大を維持するために適切に行動するとの文言が維持され、次回9月18日の追加利下げが示唆される展開が妥当なところではないだろうか。FOMC前の108円半ばの水準から鑑み、利下げ織り込み後退の程度によっては、109 円台の回復も想定しておきたい。
一方、米国の利下げ期待の低下に対し、米国の株式相場は、下落で反応する公算が高い。株式市場の後退は、ドル円の上昇を阻む要因となり易く、特に米国では景気後退の予兆として警戒される長短金利差の逆転が続いている状況でもあり、一度の利下げ程度ではその逆転は解消する状況でもなく、緩和姿勢が不十分と市場が見れば、緩和督促の株安圧力が強まる事も警戒しておきたい。結果、ドル金利上昇のドル高が、株安によるリスク回避の円高によって打ち消される事になろう。こうした金融緩和の度合いが市場に与える影響をみる上で、引き続き米経済の現状把握は肝要であり、月初より、米製造業ISM景気指数や雇用統計などが控えるが、特に、雇用については好調を維持している一方、雇用者の伸び、失業率の低下、賃金の伸びの勢いが鈍化しつつある状況であり、注意深く見ていく必要がある。

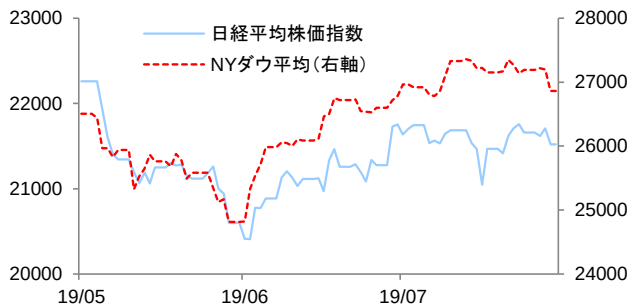
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	ISM製造業景況指数	6月	51.0	51.7	52.1
7/3	ADP雇用統計	6月	140k	102k	27k
7/3	ISM非製造業景況指数	6月	55.9	55.1	56.9
7/5	非農業部門雇用者数変化	6月	160k	224k	75k
7/11	消費者物価指数 前月比	6月	0.0%	0.1%	0.1%
7/16	小売売上高 前月比	6月	0.1%	0.4%	0.5%
7/23	中古住宅販売件数	6月	5.33m	5.27m	5.34m
7/24	新築住宅販売件数	6月	660k	646k	626k
7/26	四半期実質GDP	2Q	1.8%	2.1%	3.1%
7/30	個人消費支出 前年同月比	7月	1.5%	1.4%	1.5%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

		107.00			106.00
ブル	5名	～	ベア	11名	～
		110.00			109.50

※ レンジは中心値

田中	ベア	107.00 ～ 109.50	FOMCもこなし一旦イベントを消化、方向感の乏しい夏枯れ相場を想定。米中貿易問題の進展は期待できず、No Deal BREXITの可能性等の不安定要因継続も、世界的な金融緩和姿勢にも助けられ微妙な均衡が続く。
田坂	ベア	107.00 ～ 110.00	Fedが今後の国際情勢や米景気動向を注視しつつ必要に応じて追加利下げに踏み切る姿勢を示している状況下、米中貿易交渉の先行き不透明感が払拭されない限りは、米金利上昇余地も乏しく、ドル円の上値重い展開は継続。
大庭	ブル	107.50 ～ 110.00	米中貿易協議が再開されるも、2国間の緊張緩和する期待は低く、先行き不透明感が続く中、ドルを積極的には買いにくい。ただ、足許米経済の底堅さは確認できており、今後過度な利下げ織込みの巻き戻しにサポートされ、じり高を予想。
高村	ブル	107.00 ～ 110.50	米国が利下げへと転換しても、経済のハードデータは底堅く、早期リセッションには至らないと見る。米金利市場は悲観的に織り込みすぎており、株式市場も堅調さを維持する中、ドル円はもう一段の上昇を想定したい。
谷舗	ベア	106.00 ～ 109.50	上海会合やFOMC越えの安心感から一時的なドル買い局面はあろうが、年内追加利下げが織り込まれている状況下、ドル円の上値は限定的となろう。トランプ大統領のFed批判トーンが強まっていることも、米金利の先安観を強める。
大谷(未)	ベア	106.00 ～ 109.50	FRBによる複数回の利下げ観測は依然として強く、ドル円は引き続き上値重く推移すると予想。また、米中貿易摩擦の長期化懸念や英国のEU離脱を巡る不透明感の台頭など、様々な地政学的リスクもドル円を下押しする要因となるだろう。

竹内	ベア	106.00 ～ 110.00	米金融政策における複数回の利下げが見通される中、積極的なドル買いにはなり難い。また米中関係の劇的な改善は望み薄く、ドル円は中長期的な下落サイクルに。本邦勢の買いに下値は拾われようが上値を徐々に切り下げる展開か。
加藤	ベア	105.00 ～ 109.00	金利正常化相場の巻き戻しは途上であるとする。米国の金融政策が6年ぶりに変更されることの意義はやはり小さくないと思う。本邦投資家からの8月円転フローのアンマリーも考えると、ドル/円は幾分そのレベルを切り下げそうだ。
関	ブル	107.50 ～ 110.00	米国は2021年3月までに25bp利下げを4回織り込んでおり、7月のFOMCを経て利下げの織り込みが後退する内容となれば、ドル円のサポート材料になると想定。但し、緩和督促の株安圧力が強まる事も警戒され、上値は限定的か。
光石	ベア	106.00 ～ 110.00	他の主要国対比緩和余地が大きい米国への利下げ期待は簡単に剥落しないものとみており、ドルの上値を抑える要因となろう。地政学リスクの高まりや英EU離脱問題等リスク回避要因も引き続き多くドル円の上値は限定的と予想している。
岡本	ブル	106.00 ～ 110.00	Fedの追加利下げは指標を勘案すると見込みにくく、米金利の低下余地は大きくないと予想。米中貿易戦争長期化を受けイベント通過後は盛り上がり欠けると見られ、ゴルディロックス相場の中月末にかけ緩やかな上昇を予想する。
上野	ベア	106.00 ～ 109.50	足元はEURとGBPの弱さもありUSDが値持ちしている印象。ドル円についてもその副次的な効果を享受する形で確りとした推移をしているが、世界的な緩和姿勢の鮮明化を受けて、次第に相対的な円の需要は高まると想定している。
玉井	ベア	106.00 ～ 109.50	直近の米国経済指標は底堅い結果となっているが、FRBによる利下げが意識される中ではドル円は上値の重い展開が継続するであろう。米中貿易協議も進展が見られず長期化する場合は米国経済への影響も懸念される。
原田	ベア	106.00 ～ 109.50	今後も複数回利下げが織り込まれている状況下、米金利は低下傾向となろう。JGB金利の金利の動きが限られる中、日米金利差は縮小するだろう。株式よりも金利との相関が高まっている足許、ドル円も軟調な動きを予想。
森谷	ベア	106.50 ～ 109.50	世界各国で中銀の利下げやハト派シフトが進む一方、異次元緩和が長期化している日銀については追加緩和余地は限定的との見方は根強い。FRBに対する追加利下げ観測も意識される中、ドル/円は下落する展開を予想。
大熊	ブル	107.00 ～ 110.00	FRBがハト派に転じたものの、米国は本格的に景気後退入りした訳ではなく、米株は最高値を更新する等、経済は底堅い。急激な進展は見込みにくい米中貿易交渉が継続していることも支援材料となりドル/円は底堅い展開を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0880 ~ 1.1330
EUR/JPY 118.00 ~ 123.00

市場営業部 為替営業第二チーム 山本 一暁

■ 先月の為替相場

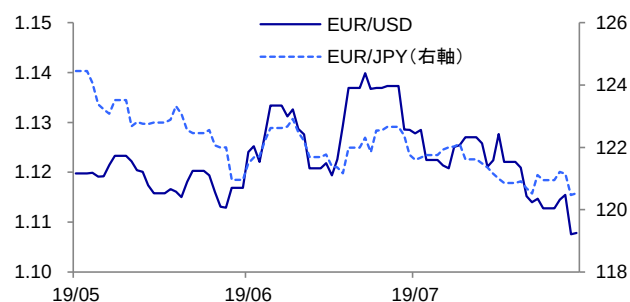
先月のユーロ相場は、対ドルで、対円とともに下落した。第一週オープン間もなく、ユーロ/ドルは一時月高値となる1.1371をつけるも、前週末G20での米中首脳会談の通商協議再開合意、第4弾追加関税の延期等を受けた全般的なドル買い戻しの動きに1.12 台後半まで下落。ユーロ/円も月高値123.34円をつけた後はユーロ/ドルに連れ安となった。その後、ECB 次期総裁にハト派ラガルドIMF 専務理事が浮上との報道や独10年債利回りが過去最低水準まで低下したこともユーロ相場の重石となると、5日、米6月雇用統計の良好な結果を受けドル全面高となりユーロは対ドルで一時1.1208まで続落。対円でも121円台半ばまで下落した。第二週、10日、パウエルFRB議長議会証言がハト派な内容であったことからドル全面安の展開にユーロ/ドルは反発。11日、ユーロ/ドルは週最高値1.1285まで続伸も米6月CPIが予想対比良好な結果となったことからドル買いに転じると、ユーロ/ドルは1.1250割れまで反落。その後、FOMC高官等のハト派コメントにドル売りの流れとなったことで1.1270台まで反発した。ユーロ/ドルが概ね1.12台で方向感なく推移したこと、ユーロ/円は121円台半ばから122円台前半のレンジ内での値動きとなった。第三週、16日、独7月ZEW景気期待指数が事前予想を下回ったことからユーロ売りが強まり、米6月小売売上高が堅調な値だったことも相俟って1.1212まで下落。18日、「金融緩和の論拠強まった」とするクラリダFRB副議長の発言を受け、ドル売りが持ち込まれるとユーロ/ドルは1.1280まで急伸。ただし、翌週にECB理事会を控える中、ユーロ/ドルには利益確定の売りも入り急伸前の水準である1.12 台前半まで押し戻された。同週、ユーロ/円は週央からの広範なドル売りに120円台後半まで軟調推移した。第四週、23日はドルが買い戻される展開に1.12ちょうど近辺のストップロス巻き込みながら1.11 台半ばまで下落。翌24日、ユーロ圏7月マークイット製造業PMIの弱い結果を受けてユーロ/ドルは、1.11 台前半まで続落した。25日は、ECB 理事会の声明文で政策金利を現行水準もしくはそれを下回る水準にすると明記されたことからユーロ/ドルは一時年初来安値となる1.1101 まで売られた後、ドラギ総裁がリセッションリスクは依然低いと述べたこと等から1.1188まで急騰、神経質な値動きとなった。ユーロ/円については、ECB理事会直後に月安値120.06円をつけるも、その後のドラギECB総裁の会見内容を受けてショートカバーが強まり、一時、121.38円まで急反発した。第五週、週末に控えるFOMCに向けたポジション調整からユーロ/ドルは1.11 台前半から半ばまでじり高、ユーロ/円については121円絡みで方向感乏しく推移した。

■ 今月の見通し

今月のユーロ相場は、上値の重い展開を予想する。先月のECB理事会は、政策金利である主要リファイナンスオペ(MRO)金利を0.00%、市場の上限金利となる限界貸出金利は0.25%、そして市場の下限金利となる預金ファシリティ金利を▲0.40%とそれぞれ据え置きを決定した一方で、フォワードガイダンスを明確に下方修正。その後のドラギECB総裁の会見では特段目新しいコメントが出されなかったことから、いわゆるsell the factのショートカバーがしっかりと入る、ある意味、ECB理事会らしい荒い値動きとなった。特段目新しいコメントが出されなかったことは、逆説的に、市場参加者の間で次なる緩和策を巡っての憶測が高まりやすい状況が継続することを意味する。「フォワードガイダンス強化」、「マイナス金利深堀り」、「当座預金の階層化システムの導入」、ひいては「拡大資産購入プログラム(APP)の再開」等々のメニューが想定されるなかでどういった組合せが今後、打ち出されるのかを巡って、ユーロは売られやすい地合をメインシナリオに置きたい。また、ここ数ヶ月の域内主要経済指標は市場予想対比弱い結果が散見され、そもそもの域内経済の減速が懸念される中では、ユーロは積極的に買いづらいと考えられる。かかる状況下、USDについては一時期ほど、下落圧力が働いていない。前述の欧州圏とは対照的に、雇用指標を中心に国内景気の底堅さが確認されていることに加え、先々月のG20を契機に再開した米中通商協議に対する期待感が高まる中、期待感が先行し、債券相場で過度に織り込まれた米政策金利引き下げ観測が徐々に剥落していく過程にあると考える。「予防的利下げ」を実施することはほぼ確実視されているがゆえに、先般のECB理事会と同様に債券のsell the factも想定され、米債利回り上昇、ドル買い戻しの相手方としてユーロは選好されやすいと予想する。加えて、ボリス・ジョンソン氏にリーダーシップが移行後、ハードブレグジット懸念は一層高まっており、英ポンド安につられたユーロ安にも注意する必要があるとすうだ。

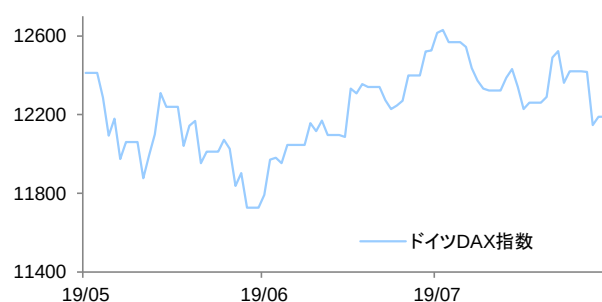
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	独製造業受注(前月比)	5月	-0.20%	-2.20%	0.40%
7/16	独ZEW調査現状指数	7月	5.0	-1.1	7.8
7/16	独ZEW景気期待指数	7月	-22.0	-24.5	-21.1
7/24	ユーロ圏マークイット製造業PMI	7月	47.7	46.4	47.6
7/25	ECB主要政策金利	7月	0.00%	0.00%	0.00%
7/25	ECB限界貸出ファシリティ	7月	0.25%	0.25%	0.25%
7/25	ECB限界預金ファシリティ	7月	-0.40%	-0.40%	-0.40%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	2名	1.1000 ～ 1.1350	ベア	14名	1.0925 ～ 1.1250
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

田中	ベア	1.1000 ～ 1.1300	米欧の景気格差、No Deal BREXIT懸念、スペイン政局とユーロは売り材料が目立ち軟調地合い継続を予想。一方、トランプ大統領がユーロ安を容認するとも思えず下落幅も限定的となろう。
田坂	ベア	1.0900 ～ 1.1250	ECBが積極的な緩和姿勢を示す中、周辺国の政治リスクや冴えないユーロ圏経済など市場参加者のECB緩和観測を強める材料はあふれていることから、2年ぶりに1.11を割り込み下落幅を拡大する展開を予想。
大庭	ベア	1.0950 ～ 1.1250	7月ECB理事会では、ドラギ総裁が9月に包括的な刺激策の実施を決意している様子が窺えた。今後2カ月で経済活動の改善の兆しが見られない場合、次回の理事会で金融政策を緩和するため充分な根拠となり、上値の重い展開を予想。
高村	ベア	1.0950 ～ 1.1200	ユーロ圏は経済指標の弱さが目立ち、ドラギ総裁はハト派スタンスを強めている様子。ドルも本格的に売り込まれる局面ではないと考えており、ユーロは基調として上値の重い展開が続くと予想。
谷舗	ベア	1.1000 ～ 1.1300	ECBは緩和姿勢を明確にしているが、米国に比べ緩和余地が少なくその点はEURのサポート材料。ただし、域内経済の軟化や政情不安、No Deal Brexitへの懸念などが煽る中、積極的にEURを買う動きは想定しにくい。
大谷(未)	ベア	1.0900 ～ 1.1200	欧州経済の先行き懸念は依然として強く、ECBが金融緩和の姿勢を示唆したこともあり、ユーロは引き続き軟調に推移すると予想。また「合意なきブレグジット」への警戒感が高まっていることもユーロの下落圧力となろう。

竹内	ベア	1.0900 ～ 1.1300	ユーロ圏経済は減速が顕著な中、金融政策でも一段の利下げを織込み易い。南欧における政局不安や潜在的な債務問題を踏まえると買い材料は乏しい。一方、全般的なドル安進行がユーロ下落を緩和する流れか。
加藤	ベア	1.0900 ～ 1.1300	ECBが更なる緩和を示唆したことによりFRBは催促されて行動せざるを得ない状況であろう。その点ではEUR売りだがGBPに対する売り圧力は継続する可能性高くEURは連れ安の可能性も。
関	ベア	1.0900 ～ 1.1300	ドイツPMI・IFOも低調であり、先行きのユーロ景況感も懸念される。7月FOMCを経て過度な米利下げ期待が剥落する事で、ドル買い戻しとなる事を想定。一方、日銀はECB以上に緩和余地に乏しく、対円では下値不安が大きい。
光石	ブル	1.1000 ～ 1.1400	欧州圏の経済状況や政治状況に加え、ECBがハト派に傾斜したことを勘案するとユーロの買い材料は乏しいが、相対的に金融緩和の余地が大きい米国に対する利下げ期待は根強く、ドルの下落がユーロを支えるものと見ている。
岡本	ベア	1.1000 ～ 1.1300	7月ECB理事会で、ドラギ総裁の6月シントラ発言が追認。伊など政治リスクも残存しており積極的にEURを買う状況ではなく、米Fedのハト派姿勢との綱引きは残るが、追加緩和の必要性はEU圏の方が高くEUR売りが優勢か。
上野	ベア	1.0950 ～ 1.1250	マイナス金利の状況の中で、緩和姿勢を鮮明にするECB。ブレグジットや政局不安等を抱える中、積極的にEURを保有する向きは出にくいだろう。EURは引続き軟調な展開を予想している。
玉井	ブル	1.1000 ～ 1.1300	ECBは9月に利下げに踏み切る可能性が高いが、FRBもハト派な中、底堅い展開を予想する。ただ、英国の合意なき離脱の懸念が高まっているほか、ユーロ圏の指標は引き続き軟調であり上値は限定的であろう。
原田	ベア	1.0900 ～ 1.1200	ECBは7月の理事会において、政策金利フォワードガイダンスに利下げバイアスを追加し、政策オプションの検討をユーロシステム委員会に指示することを決定した。目先は9月における追加緩和を意識する展開を想定。
森谷	ベア	1.0900 ～ 1.1200	7月ECB理事会の結果を受け、9月会合における追加緩和予想が高まっている状況。FRBも利下げステージに突入したが、追加利下げの時期は不透明な状況下、ユーロ売り圧力が上回る展開を予想。
大熊	ベア	1.0950 ～ 1.1250	FRBの予防的な利下げとは違い、ECBによる利下げは欧州の景気後退に対応する為の必要に迫られた利下げである。欧米の金融政策の違いに加えて、英国の合意なきEU離脱への懸念が高まる状況下ではユーロは軟調推移を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2000 ~ 1.2500
GBP/JPY 129.50 ~ 135.00

欧州資金部 神田 史彦

■ 先月の為替相場

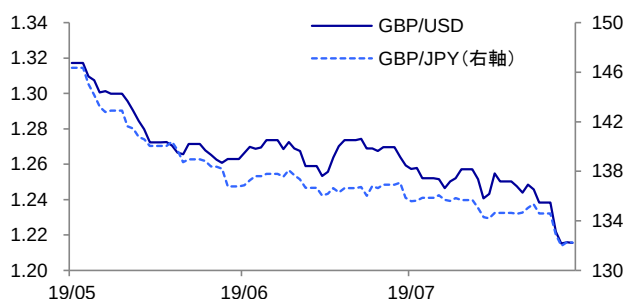
先月のポンドは合意なき離脱懸念から下落が止まらなかった。1日に月中高値1.2708をつける立ち上がりだったが、6月製造業PMIが6年ぶりの低水準となる中で売られる。翌2日は英中銀カーニー総裁の、「通商協議の緊張が経済のダウンサイドリスクを高めた」のヘッドラインで1.26割れ。5日はジョンソン前外相が合意なき離脱の準備を加速させると発言しポンド売り。午後に米6月非農業部門雇用者数が予想を上回りドル買いとなるとポンドは1.25を割り込む。9日にパウエルFRB議長の議会証言を翌日に控える中でドルが買われるとポンドは一時期年初来安値付近まで下落。野党労働党が「次期首相はブレクジット案を再度国民投票で問う必要がある」とし「EU残留」の方針を表明したとの報道には反応薄だった。なおハント外相とジョンソン前外相のテレビ討論会が同夕に行われたがジョンソン氏優勢を崩すには至らなかった。10日は英議会が10月末前後の議会閉会を阻止する動議を可決したこともあり、新政権が合意なき離脱を議会を閉じることで強行することが難しくなり若干の買戻し。午後にパウエル米FRB議長が議会証言で利下げを示唆するとドルが売られポンドは1.25台を回復。その週末までドル弱含みが続く1.25後半まで買い戻される。16日は次期首相候補の両名が前日の討論で、メイ首相がEUと合意したアイルランド国境のバックストップ条項を受け入れられないと表明し合意なき離脱懸念でポンド売りに。18日はEUバルニエ氏がアイルランド国境の代替案策定への用意があるとコメントしたと伝わりポンド買い(ただ、その後のバルニエ氏の発言と整合的ではなく真偽は不明)。Fed理事2名が0.5%利下げを示唆しドルが売られたこともあり1.25台を回復。その後はじりじりとポンドが値を下げ、23日にジョンソン新首相が決定されると若干上下するも1.24中盤で落ち着く。翌24日は新首相の正式就任を控える中ポンドの買戻しが続き1.25台を挟んでもみ合いに。25日の新政権発足後にジョンソン首相は議会休会前に下院で答弁に臨み、従来のブレクジット方針を繰り返し合意なき離脱懸念が高まると、週末26日には特段材料の出ない中1.23台まで売られる。29日は、新政権の動きが「合意なき離脱を前提にしている」との週末報道でポンド売り進む。年初来安値を更新すると下げ止まらず、翌30日には月中安値1.2120を付けた。

■ 今月の見通し

引き続きブレクジット動向が最大の注目。基本的にはポンドの下落継続を見込む。英議会が9月3日まで夏休みとなるため国内での大きな動きはないだろうが、EUとの水面下での折衝や内閣不信任に向けての動きが気になる。フォンデルライエン欧州委員会新委員長やメルケル独首相からもブレクジット期限の再延期を考慮する旨のコメントがあり、EU側は再延期にも前向きな模様がうかがえる。また興味深いことに、18日に(事実上の)英副首相であったリデントン氏がEUからブレクジットの5年凍結の話があったとコメントしている。この話は実現すれば恐らく英国のEU予算拠出を伴うためEUとしては好ましいと思われ、多かれ少なかれそのような考えはEU側の一部にはあるのだろう。ただブレクジットの先送りは不透明感の先送りに他ならず英経済を蝕む。たとえば英国統計局が17日に発表した5月のロンドン住宅価格は前年同月比4.4%の下落で、これは約10年ぶりの下落幅だった。世界有数の金融センター・ロンドンへの投資手控え、ひいては地位低下が明確だ。この閉塞感打開がジョンソン新首相には求められるわけだが、時間的制約を考えると10月末までにEUとの交渉をまとめ英議会を突破するのは現実的ではない。EU側はこれまで頑なに離脱協定(含むアイルランド国境のバックストップ)再交渉を拒んでおり、ジョンソン新首相はメイ首相案を撤回し新たな代替案で合意するまでは390億ポンドのEUへの清算金を支払わない、との姿勢で臨むようだ。ただ、離脱強硬派の閣僚で「戦時内閣」を設置したと報じられており、英政府側は合意なき離脱を目論んでいる模様。それにはもちろん議会の反発は必至で内閣不信任に発展する可能性はあるが、議会休会中の8月に展開が急変する可能性は低く9月以降の材料か。続々と与党内穏健派の元閣僚らも反旗を翻しており内閣不信任の可能性はありそう。その場合は総選挙・国民再投票期待からポンドの買いリスクとなる。ちなみに英ブックメーカーのオッズでは2019年に総選挙が起こる可能性はおよそ58%となっている。英中銀は1日に金融政策委員会を開き据え置きが予想される。従前は強気姿勢であったカーニー総裁らも、他中銀がハト派色を強める中でトーンは弱まっており、合意なき離脱リスクも高まる中でその発言に注目が集まる。

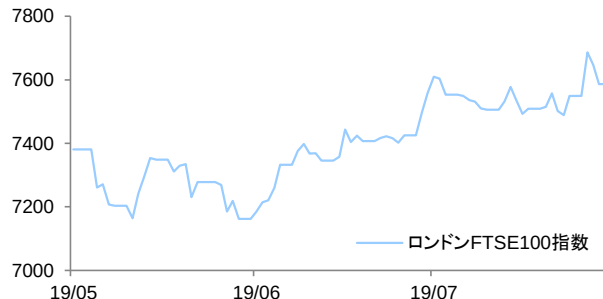
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	製造業PMI	6月	49.5	48	49.4
7/2	建設業PMI	6月	49.2	43.1	48.6
7/3	サービス業PMI	6月	51.0	50.2	51.0
7/10	鉱工業生産(前年比)	5月	1.2%	0.9%	-1.1%
7/10	製造業生産(前年比)	5月	1.1%	0.0%	-1.0%
7/16	ILO失業率	5月	3.8%	3.8%	3.8%
7/17	消費者物価指数(前年比)	6月	2.0%	2.0%	2.0%
7/18	小売売上高(含自動車/前年比)	6月	2.6%	3.8%	2.2%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6750 ~ 0.7050
AUD/JPY 73.50 ~ 76.50

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

■ 先月の為替相場

先月の豪ドルは、0.70を挟み上下する展開となった。
6月末に行われたG20がそれなりにポジティブな内容だったことから、豪ドルは月初、大きく値を切り上げ、対ドルで0.70前半、対円では75円後半で取引開始。1日、株高が一服したことに加えさえない中国指標も重石となり豪ドルは反落し0.69半ばまで下落。2日、RBAが25bp下げを決定、声明文に新たに加わった文言がどちらかと言えばタカ的と判断され、豪ドルは買いの反応で0.69後半まで上昇。3日、ADP雇用統計他、米経済指標が軒並み予想を下回ると、米金利低下、ドルは他通貨比下落し、豪ドルは0.70前半まで上昇した。5日、米6月雇用統計が予想比強めの内容だったことから、ドル買いが強まり豪ドルは0.69後半まで下落。9日、翌日にパウエル議長の議会証言を控え、ドル買戻しの流れが継続し、豪ドルは0.69前半まで下落。
10日、豪7月消費者信頼感指数が約2年ぶりの低水準になったことを受けて、豪ドルは一時6月以来の安値0.6911まで売り進まれた。その後、パウエル議長による議会証言が緩和示唆の内容だったことを受け、豪ドルは上昇に転じ0.69半ばまで戻した。米国株式市場が連日の高値更新する中、15日発表された中国4～6月期GDPが若干強めの結果となったこともサポート材料となり、豪ドルは0.70半ばまで上昇。16日、米6月小売売上高が強めの結果となったことが材料視され、米金利上昇、ドル買いの反応となり、豪ドルは0.70前半まで下落。18日、NY連銀総裁の講演が利下げを示唆する内容だったことから米ドルは大きく売られ、豪ドルは0.70後半まで上昇した。19日、NY連銀が前日の同連銀総裁の発言に対し、市場の思惑を修正するような内容の発表をしたことを受けてドル買戻しが強まり、豪ドルは0.70半ばまで下落。
23日、米中通商協議再開準備のニュースに加え、英保守党の党首選でジョンソン氏が勝利しハードランディングの可能性が高まったことから、ドル買いが強まり豪ドルは0.7000エリアまで下落。24日、豪7月PMIが予想比弱い結果となり、その後、豪大手銀行がRBA利下げ予想の前倒しを発表すると、豪ドルは0.69後半まで売り進まれた。25日、ロウ豪中銀総裁のスピーチは、低金利が長期間続く予想するのは妥当、必要があれば更なる追加緩和と引き続きハト派な内容となり、金利が低下、豪ドルも0.69半ばまで下落した。31日、豪4～6月期CPIは前期比・前年比ともに市場予想を上回り、豪ドルは買いで反応。その後、FOMCでは予想通りの25bpだったが、パウエル議長の発言がタカ的だった為、ドルが買い進まれ、豪ドルは一時6月に付けた安値0.6832まで下落し、0.6840近辺で引けた。

■ 今月の見通し

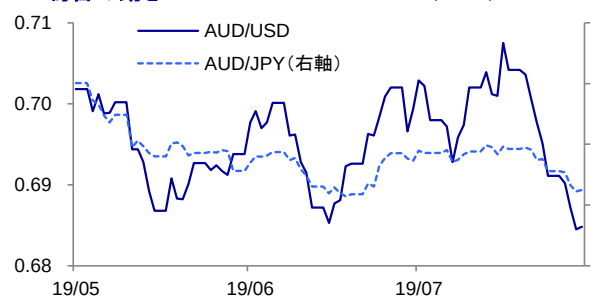
8月の豪ドルは上値の重い展開を予想する。
豪州では今月初旬、与党保守連合が提案している総額1,580億ドル規模の所得税減税案が可決された。これにより、第1段階として年収4万8,000～9万豪ドルの所得者は最大1,080豪ドルの即時効果を受ける見込みとなる。加えて、連邦政府は1,000億ドルをインフラ計画に投じるとしており、一連の財政政策による経済底上げ効果が期待される。
金融政策では、7月RBA理事会では2ヶ月連続利下げが実施され、政策金利は1.00%に引き下げられた。声明文では前回と同様に、「成長とインフレを支える為に政策調整を行う」との文章が含まれていたが、そこに「必要であれば」との新たな文言が加わったことがタカ的と解釈されたことや、ロウRBA総裁による連続利下げの効果を見極めるとの発言から、先月初頭には追加利下げ観測が若干後退。その後、月後半にロウRBA総裁が「低金利が長期間続く」と予想するのは妥当、「必要があれば更なる追加緩和を行う」とハト的な発言をおこなうと、利下げ観測が再び高まり、足許、金利市場では先行き1年間で約2回程度の利下げが織り込まれている。
追加利下げ観測の高まりを受けて豪国債金利は月末にかけて一段と低下し、各年限で史上最低金利を更新する一方、豪州株式相場は低金利の長期化観測に加え減税効果への期待から史上最高値を記録している。為替相場では月央に進行した50bpの米利下げ観測が月末にかけて後退する中でドル高が進行、ロウRBA総裁によるハト派発言も加わり、豪ドルは月後半にかけて大きく売り進まれている。更に月末のFOMCでのパウエル議長によるタカ派なコメントをきっかけに、これまで進行してきた利下げ観測が後退し、豪ドルは安値圏まで下落して月末を迎えた。米国利下げ観測後退によるポジションまき戻しの動きから短期的には豪ドルに下落圧力がかかるものと思われる。FOMCをこなし、豪州では来週のRBA理事会に注目が移るが、タカ的なFOMCに加え、豪CPI、中国指標どちらも上向き始めている中、こちらも追加利下げを急ぐ展開は予想しづらい。米豪利下げ観測に左右される相場環境がしばらく継続すると思われる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における今月(先月)の国民的イベント』
南半球に位置するオーストラリアでは、クリスマスのは季節は真夏、サンタクロースもサーフボードに乗ってやってきます。そんなオーストラリアでは、ローストビーフやモルドワインなどのいわゆるクリスマス料理を真夏の暑いクリスマスに食べるのは敬遠されます。寒い時期にクリスマス料理を食べたい！と願うオーストラリアでは、冬となる7月に“Christmas in July”と銘打って、友人や親戚と集まってクリスマス料理を楽しむ習慣があります。この時期になると現地のレストランではクリスマスメニューが並び、盛り上がります。ただ、さすがに、サンタクロースは来てくれないようです。

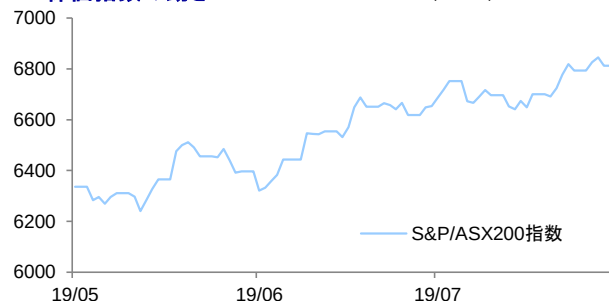
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	住宅建築許可件数(前月比)	May	0.0%	0.7%	-4.7%
7/3	豪州準備銀行理事会	Jul	1.0%	1.0%	1.25%
7/3	貿易収支 (A\$ mn)	May	5,250	5,745	4,871
7/4	小売売上高(前月比)	May	0.2%	0.1%	-0.1%
7/18	失業率	Jun	5.20%	5.20%	5.2%
7/18	労働参加率	Jun	65.9%	66%	66%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.3000 ~ 1.3400
CAD/JPY 80.00 ~ 85.00

グローバルマーケット業務部カナダ室 金本 玲子

■ 先月の為替相場

7月のUSD/CADは1.3093でオープン。概ね1.3050～1.3150の狭いレンジで推移。月間高値は1.3215(7/31)、月間安値は1.3016(7/19)。

3日、カナダ5月の貿易収支は予想を大きく上回り、カナダドル買いが進んだ。輸出は前月比4.6%増の531億ドルと3か月続けて拡大、貿易収支は7億6200万ドルの黒字と2016年12月以来のプラスに転じた。

5日に発表されたカナダ6月の雇用統計は、予想に反しネット雇用変化が2200人減少。一方、米6月の雇用統計は、非農業部門および民間部門の雇用変化が予想以上に上昇、また平均時給の前回値も上方修正された。これを受けカナダドルは急落、USD/CADは一時1.3137を付けた。

10日、8:30AMに公表されたパウエルFRB議長の議会証言の原稿が、7月末会合での利下げを示唆する内容であったことから、USDドルが主要通貨に対して下落、USD/CADも一時1.3070を付けた。10:00AMには、カナダ中央銀行が政策金利を市場の予想通り1.75%に据え置くことを発表。声明文では、世界経済の減速懸念と米中を中心とする貿易摩擦が世界経済およびカナダ経済に及ぼすリスクが強調された。今後の金利政策の道筋については名言を避けたものの、マーケットはこれを予想以上にハト派な内容と受け取り、カナダドルは下落、USD/CADは1.3142を付けた。しかし午後には、6月FOMC議事要旨が公表され、多くの委員が早期利下げの必要性を指摘していたことが明らかになった。これを背景に7月末会合での25bpの利下げ期待と、一部では50bp利下げの期待も高まり、再びUSDドル売りが優勢となり、USD/CADは1.3081でクローズした。

19日のカナダ5月の小売売上高は前月比0.1%減、除自動車では0.3%減といずれも予想を下回る結果となり、データ発表直後からカナダドルが急落。また22日に発表されたカナダ5月の卸売売上高も前月比1.8%減と、市場予想0.5%増を大幅に下回った。この結果を受け、22日以降カナダドルは下落傾向となり、29日現在までUSD/CADは1.3150周辺での取引が続いている。またカナダ国債2年物利回りは1.50を下回る水準で推移、7月前半と比較し、米2年債利回りとの差もやや拡大傾向にある。

■ 今月の見通し

7月10日、カナダ中央銀行は政策金利を1.75%に据え置き、2018年10月から6会合連続の金利据え置きとなった。第2四半期のカナダの成長率については、原油輸出の拡大および第1四半期の気候不安要因緩和などがプラスに材料になるとし、予想を従来の1.3%から2.3%に引き上げた。またカナダのGDPについては、2019年予測を4月時点から0.1%上方修正し1.3%としたものの、2020年については1.9%と4月時点の2.1%から下方修正した。

輸出や製造業売上高など、7月中旬までのカナダの経済指標は比較的好調だったものの、小売売上高、卸売売上高が予想を下回る結果となり、7月後半はカナダドル安傾向となった。次回の9月カナダ中央銀行政策決定会議に向けてカナダ8月の経済指標が注目される。予想を下回る経済データの発表が続けば、カナダドル売りが進み、今後の政策金利の決定にも影響を与えるものと予想される。

またカナダ中央銀行は主要なリスクとして貿易摩擦を挙げており、今後の米中関係が引き続き注目される。最近のカナダの輸出データは好調であるがゆえに、貿易摩擦および世界経済の減速がカナダ経済に与える影響は大きい。ポジティブな経済データが発表されれば、一時的なカナダドル買いに動くことは考えられるが、原則USD/CADは1.31周辺での取引が続くと予想される。反対にネガティブな経済データの発表が続けば、カナダドルが1.33前半まで達する可能性も予想される。

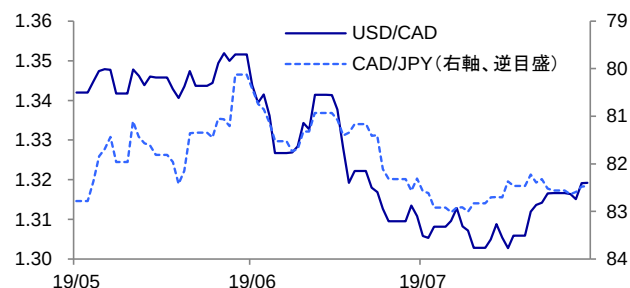
7月31日、2:00PMにはFRBが市場の大方の予想通り、25bpの利下げを発表した。FRBが市場予想通りとはいえず利下げに踏み切ったことで、より金融緩和の流れがグローバルに進むものと予想される。声明文では経済、雇用、インフレ率について持続的な成長が見込まれるものの、この見通しには不確実性が残るとした。また、今後の経済データを注視し、経済成長の持続へ適切に行動するとも述べ、必要に応じて追加利下げを実施する可能性も示唆した。発表後、USD/CADは一時1.3215まで上昇、その後も1.32周辺での取引が続いている。今後利下げについてより踏み込んだ発言が出れば、USDドル売りが進み、USD/CADは1.31を下回る可能性も考えられる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における今月の国民的イベント』
カナダの国民的イベントといえば、先日「カナダの祝日」で紹介した7/1のカナダデーです。1867年7月1日にカナダ連邦が成立したことを祝う建国記念日で、街はお祭りムード一色となり、各地で花火の打ち上げやイベントが開催されます。その他にも冬の寒さが厳しいカナダでは、夏を楽しむための様々なフェスティバルやイベントが各地で開催されます。トロントで誰もが知っている夏のビッグイベントといえばCanadian National Exhibition (CNE)。オンタリオ湖の湖畔、Exhibition Placeに特設される移動式の遊園地です。メリーゴーラウンドから絶叫系の乗り物まで楽しめるのはもちろん、広大な敷地で開催されるこのイベントでは、航空ショー、ライブミュージック、アイススケートショーなどを見ることもできます。フードエリアも充実しており、50店舗以上が入る巨大フードコートやクラフトビールコーナーなどがあり、大人も子供も1日中楽しむことができます。CNEは1879年から続く、カナダの農業、工業、芸術などを紹介するために始まった伝統的なイベントのため、カナダの農業や畜産について知る事のできる教育系の展示が行われていたり、クラフトパブリオンでアート作品を購入することもできます。毎年8月下旬から9月の最初の月曜日であるLabour dayという祝日まで開催されるこのイベントが終わると、トロントの人々は夏の終わりを感ずると言われています。

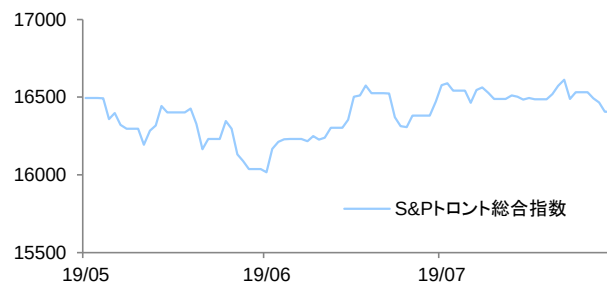
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	マクイットカナダ製造業PMI	6月	-	49.2	49.1
7/3	貿易収支	5月	-1.7bn	0.76bn	-1.08bn
7/5	雇用者数変化	6月	9.9k	-2.2k	27.7k
7/5	失業率	6月	5.5%	5.5%	5.4%
7/9	住宅着工件数	6月	208.6k	245.7k	196.8k
7/10	カナダ中銀政策金利	-	1.75%	1.75%	1.75%
7/17	CPI (前年比)	6月	-0.3%	-0.2%	0.4%
7/19	小売売上高 (前月比)	5月	0.3%	-0.1%	0.2%
7/22	卸売売上高 (前月比)	5月	0.5%	-1.8%	1.6%
7/31	GDP (前月比)	5月	0.1%	0.2%	0.3%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1160	1210
KRW/JPY	8.929	~ 9.434
JPY/KRW	10.600	~ 11.200

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 下山 泰典

■ 先月の為替相場

7月のドル/ウォン相場は、上昇した。
月初は、1150.50でオープンし、この日のうちに月安値となる1148.90をつける。6月29-30日で開催された米中首脳会談や米朝首脳会談がやや楽観できる着地となったこと等を受けて、リスクセンチメントが改善した。しかし、発表された日本の韓国に対する半導体輸出管理の運用見直し等を受け、センチメントや株価が軟調となり、ウォンにも売り圧力がかかり、また米5月雇用統計の強い結果等を受けて8日の週にかけて1180台まで上昇した。
8日の週では、10日のパウエルFRB議長の議会証言に注目が集まったが、注目された同議会証言では、やや進みすぎていた印象もあった利下げ観測を牽制することなくハト派的なトーンを打ち出してきたため、米債利回りの低下とともにドル売りが進行、1170.30までは下落したが、1170レベルでのサポートの強さを意識させる動きともなった。

15日の週では、18日のBOK会合に注目が集まったが、同会合において25bpの利下げが決定された。コンセンサスが出来ていたとは言い難く、一時1184.50まで上昇したが、李総裁の会見で追加利下げの可能性が明確には示されなかったこと等を受けウォン買いに転じた。その後、クラリダFRB副議長やウィリアムズNY連銀総裁などから米利下げについてややハト派的と捉えうる発言がありドル売りが強まる局面はあったが、結局1170レベルではサポートされた。

22日の週では、25日に韓国大手IT企業の不芳な決算が発表されたことや、同日海外時間に発表されたECB理事会の結果が市場予想よりもハト派的でなかったことなどを受け、ドル/ウォンには上昇圧力がかかり、翌週の26日には月高値となる1186.20をつけた。その後は、月末のFOMCを待つ形で動意に乏しい展開となり、1183.10でクローズした。

■ 今月の見通し

8月のドル/ウォン相場は、底堅い展開を予想する。
各国中銀が利下げに動いた中、今後は世界的なファンダメンタルズや中銀動向、米中貿易摩擦、米-イラン間の摩擦等のリスク要因に一段と注意を払いつつ市場に臨む必要があろう。
かかる中、先月末のFOMCでは25bpの利下げが決定されるとともに、従来9月末とされていたB/Sの縮小停止を8月1日に前倒して実行する旨を明らかにした。注目されていたパウエルFRB議長の会見では、「長期的な利下げサイクルに入ったのではない」が、「利下げは1回だけとは言っていない」との旨言及があり、今後については両睨みの状況となった。経済指標や米中貿易摩擦の行方や影響等を精査しつつ柔軟に対応することだろう。B/Sの縮小停止を前倒したこと等を受け、一旦は長期ゾーンは金利が低下しているが、10年債利回りと2年債利回りの逆転が生じるほど米国や世界の情勢が悪いという認識ではなく、今後は米債利回りの上昇とともに、ドルがサポートされる展開になるのではないかと。

一方、BOKは先月18日にFOMCに先んじて25bpの利下げを決定していた。但し、半導体市況や、日本による輸出管理の運営見直し等が韓国経済への下押し圧力になる可能性は否定できず、加えて、来年4月の国会議員選挙もあるため、一段の利下げ観測が意識される可能性もある。

また、米中間や米-イラン間の摩擦では着地点を見出すのはやや困難な様相を呈してきており、リスクセンチメントが大きく改善する事態は見込みづらいだろう。

無論、様々な事象の不確実性は高い状態が継続しており、突発的なセンチメントの振幅などはありうるため、上下に振れる可能性は常に意識しておく必要はあるが、上記を勘案すれば、ドル/ウォンは基本的には高値圏での推移が継続すると考えている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における今月の国民的イベント』

先月～来月にかけて、韓国ではいくつかのイベントがあります^^

まず、先月から今月にかけて。「伏日(ボンナル)」という暑気払いで滋養食を食べる日があるんです。日本で言うところの「土用の丑の日」ですね。伏日は全部で3日あり、それぞれ初伏、中伏、末伏と呼ばれます。今年は初伏が7月12日、中伏が7月22日、末伏が8月11日に当たるようで、これらの日にはサムゲタン屋さんに行列がでたりします。

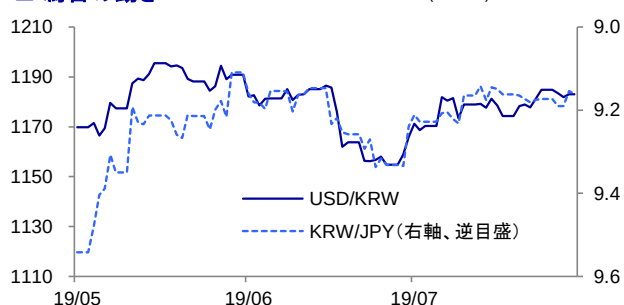
昨年でしたが、たまたまこの日に来た日本人出張者が「サムゲタンが食べたい!」というので連れて行ったところ、大行列・・・! 定期的に行っているお店で、それまで行列なんて見たことなく、予約なしで簡単に入れるはずだったんですが、あまりの長さに悩むまでもなく断念、というほど(結果、パスタ屋さんでランチになりました(笑))。後から調べて伏日だったとわかったのですが、7月～8月は韓国でも一番暑い時期ですので、こういうイベントが根付いているようです^^

そして来月には「秋夕(チュソク)」と呼ばれる、旧盆があります! 連休です! 待ち遠しいですね～! かなり前から予定を立てている人も多く、かなりの人が国内外へ動きまわります。

季節を感じながら、また連休を楽しみにしながら、1年を過ごしております^^(下山)

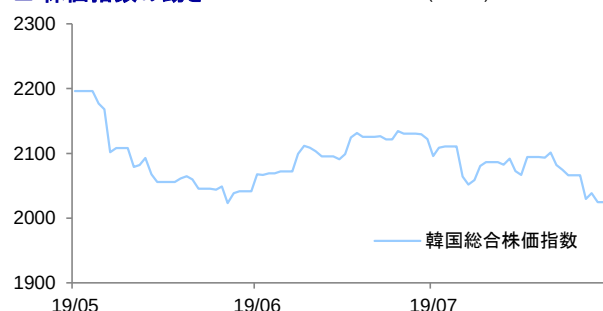
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	輸出(前年比)	6月	-13.6%	-13.5%	-9.5%
7/1	輸入(前年比)	6月	-9.6%	-11.1%	-1.8%
7/2	CPI(前年比)	6月	0.8%	0.7%	0.7%
7/4	経常収支(国際収支ベース)	5月	-	\$4949.4M	-\$664.8M
7/4	貿易収支(国際収支ベース)	5月	-	\$5392.2M	\$5668.0M
7/10	失業率	6月	4.0%	4.0%	4.0%
7/18	BOK金融通貨委員会		1.75%	1.50%	1.50%
7/25	GDP(前年比、速報値)	2Q	1.9%	2.1%	1.7%
7/31	鉱工業生産(前年比)	6月	-2.0%	-2.9%	0.2%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.90 ~ 31.30
TWD/JPY 3.40 ~ 3.55

台北資金室 三浦 勇二

■ 先月の為替相場

7月のドル/台湾ドル相場は、小幅にドル高台湾ドル安。

月初7/1のドル/台湾ドルは31.010でオープン。6月末に開催された米中首脳会談で、米中通商協議の再開、米国の対中国製品に対する新たな関税発動の見送り、華為技術への米国製品の販売を認める方針などが示されたことが好感され、株高とともに31割れへと台湾ドル高が進行。一方、買い一巡後は株高も一服し、海外資金の流出も膨らんだことで、7/3にかけては31.1台へ反発する展開となった。

7/8は前週末の海外時間に発表された米6月雇用統計で非農業部門雇用者数の伸びが前月比+22.4万人と、市場予想(同+16.0万人)を上回ったことを受け、7月FOMCでの利下げ期待がやや後退。ドル買い先行の展開となり、ドル/台湾ドルは7/9にかけて31.205まで上昇した。しかしながら、7/10に行われたパウエルFRB議長の議会証言の内容が7月FOMCでの利下げを示唆するものと市場で受け止められると、米金利が大幅低下する中、ドル売り台湾ドル買いの流れに転じ、一時31ちょうどをつける水準まで反落。

月後半に入っても、エバンス・シカゴ連銀総裁や、バーキン・リッチモンド連銀総裁のハト派的な発言を受けてドルが軟調な推移となったことを背景に、ドル売り台湾ドル買いが優勢の展開。株が軟調に推移したことから、7/18に一時31.127まで反発する場面もみられたが、ドル買いは長くは続かず。韓国ウォンが韓国中銀の利下げ後にウォン高に振れたこともあり、ドル/台湾ドルは上値を押さえられ、結果として方向感の出ない展開となった。

その後は目立った材料がない中、ECB政策理事会や月末のFOMCの結果待ちとなり、31.1を挟んだレンジで動意なく推移。なお、7/25に開催されたECB政策理事会は、フォワードガイダンスが修正され、利下げを示唆する内容となるも、概ね予想通りであったことから相場への影響は限定的で、ドル/台湾ドルはレンジ推移が続いた。

■ 今月の見通し

8月のドル/台湾ドル相場は、31.1を挟んだレンジ推移を見込む。

7月に発表された台湾の経済指標では、6月の輸出額が前年比+0.5%と、2018年10月以来、8か月ぶりのプラス成長となった。米中貿易戦争の影響を受け、全体の約40%を占める中国・香港向け輸出は同-3.8%で依然として低調であるものの、IT・通信製品の輸出が好調な米国向けが同+18.5%となり、全体の伸びを牽引する形となった。6月の消費者物価指数は、総合が前年比+0.86%、変動の大きい生鮮食品を除いたコアは同+0.49%で、ともに前月から物価の伸びが小幅に鈍化する結果となった。なお、6月の外貨準備高は4,670億ドルで過去最高額を更新。台湾中央銀行は、6月は急速に台湾ドル安が進んだ5月とは反対に、台湾ドル高方向に為替の変動が大きかったため、市場介入を行ったことが外貨準備高の増加要因のひとつと説明している。

8月は引き続き、米国の金融政策が注目される。7月FOMCにおける利下げに加え、政策金利であるフェデラルファンド金利誘導目標の更なる引き下げへの期待も高まっており、ドルは上値が重くなりやすい地合いが継続している。さらに、足元で続いている台湾株の堅調な推移は、海外資金の流入増加にもつながることから、ドル売り台湾ドル買いのサポート材料ともなる。

一方、7月のECB政策理事会で金融緩和策を再開する方針を示唆したECBの動きや、強硬離脱派のジョンソン氏が首相に就任した英国の合意なきEU離脱への懸念から、対ユーロではドル高に振れやすい状況であり、ドル/台湾ドルを下支えることも想定される。

したがって、ドル高、ドル安の両方の要因が相場へ影響を与える状況の中、6月後半以降、狭いレンジでの膠着した相場が続くドル/台湾ドル相場は、8月も方向感の出難く、レンジ推移が継続することとなる。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地における今月の国民的イベント』

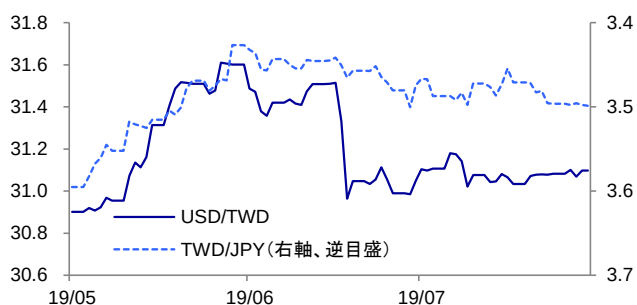
台湾では、旧暦の7月が「鬼月」と呼ばれます。旧暦の7月1日にあの世とこの世を結ぶ扉である「鬼門」が開き、先祖などの霊が戻ってくると言われており、1か月間に渡り、様々なお祭りや儀式が行われます。なお、今年は8月1日が旧暦の7月1日にあたりますので、8月は1か月間通してイベントが開催されます。

鬼月の期間中、もっとも盛り上がりだされているのが、基隆市で開催される基隆中元祭です。中元祭は旧暦7月15日の中元節(もっとも多くの霊がさまよう日)に合わせて各地で開催されるお祭りですが、基隆の中元祭は台湾の中でもっとも有名な中元祭のひとつで、地元住民のみならず、多くの観光客がこれを目当てに訪れます。

そのほか、鬼月には数多くのタブーがあります。例えば、霊がついてきてしまうので口笛を吹いてはいけない、霊が住み着いてしまうので家を建ててはいけない、濡れた洗濯物には霊がつきやすいので外に洗濯物を干してはいけない、深夜は霊が多くなる時間帯なので終電には乗ってはいけない等々です。

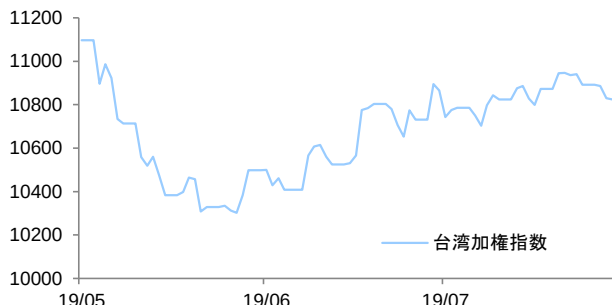
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	外貨準備高	6月	-	466.97B	464.43B
7/5	CPI (前年比)	6月	0.85%	0.86%	0.93%
7/8	輸出 (前年比)	6月	-4.80%	0.50%	-4.80%
7/8	輸入 (前年比)	6月	-1.50%	6.60%	-5.90%
7/8	貿易収支	6月	4.52B	3.87B	4.49B
7/22	輸出受注 (前年比)	6月	-2.30%	-4.50%	-5.80%
7/22	失業率	6月	3.80%	3.74%	3.75%
7/23	鉱工業生産 (前年比)	6月	-0.15%	-0.39%	-2.58%
7/31	GDP (前年比)	Q2	1.80%		1.71%

(資料)ブルームバーグ

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7800 ~ 7.8400
HKD/JPY 13.50 ~ 14.10

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【7月の香港ドル直物相場】

7月の香港ドル相場は、26ヶ月ぶりの安値となる7.7827ドルから7.8293ドルまで反発し、7.81レベルで落ち着く展開となった。香港ドル-米ドル金利差が香港ドル直物相場の主な変動要因となった。米ドル金利は、7月末のFOMCにおける利下げ可能性が当初予想の50bpからやや剥落する展開のなか小幅に反発。一方で、香港ドル金利は、予定されていた香港株式市場での大型のIPOがキャンセルされたことを受け低下した。ただし、大規模デモの継続など社会不安が高まったにも拘わらず、香港市場からの目立った資本流出は見られなかった。また、香港ドル1Yフォワード・ポイントは、▲100ポイント付近で概ね推移したものの、短期のフォワード・ポイントはここ数日プレミアムに転じる場面があった。なお、HKMAのノーマン・チャン総裁の後任として、エディー・ユー副総裁が10月より就任するとヘッドラインがあったが、現行の金融政策が継続するとの見方から香港ドル市場の動きは限定的なものとなった。

【7月の香港ドル金利市場】

香港ドル金利は、大型IPOに向けた流動性逼迫懸念が高まり、一時1か月物HIBORが2008年の世界金融危機以来の最高水準である2.994%まで上昇、その後、同IPO案件の中止を受けて2.00%付近まで再低下するなど激しい動きとなった。同様に3か月物HIBORも約10年ぶり高水準となる2.656%まで上昇も、足元2.30%付近での推移で、変動幅の大きな展開となった。香港ドルHIBOR-米ドルLIBORの金利差は7月中旬に、1か月物で+63bpから▲30bpへ、3か月物で+34bpから0bp付近とそれぞれ縮小した。中長期金利については、3Y・5Yの香港ドル固定金利は概ね1.80%レベルで落ち着いた推移で、HKMAの決済性預金残高が544億香港ドルと低水準であることを受けて高水準を維持している3か月物HIBOR金利とは大きく乖離した。

【7月の香港株式市場】

ハンセン指数(HSI)は、世界的な金融緩和期待および6月末のG20サミットにおける米中貿易摩擦の緩和等などを材料に29,000レベルまで反発した。しかし、長引く大規模デモによる社会不安がリスクセンチメントを悪化させ小売部門と不動産部門において下落が目立ち、上値重く推移した。

■ 今月の見通し

【8月の香港ドル直物相場】

8月の香港ドルは、7.78-7.84レベルで推移するものと予想。FRBの利下げと香港市中銀行の現状を踏まえれば、香港ドル-米ドル金利差は今後も香港ドル相場のサポート材料となる可能性が高く、引き続き重要な要素となるだろう。

ただし、大規模デモの一部が暴徒化するなど社会不安が増している状況下、香港市場からの資本流出圧力が高まる懸念がある。長期のフォワード・ポイントが上昇している一方で、資本流出に伴うスポットレートの下落リスクがある点には留意をしたい。また、米中関係の緊張や社会不安を受けて香港経済の成長見通しが悪化していることも踏まえ、香港ドル建て資産の過剰な伸びが修正される懸念もあろう。

【8月の香港ドル金利市場】

香港ドル金利は、FRBの約10年ぶりとなる利下げを受けたとしても現状水準のまま推移すると予想。HKMAの決済性預金残高が544億香港ドルと低水準となっていることやIPOや政治不安要素等から、短期金利は引き続き値幅の大きい展開になりやすいと考える。ただし、季節性要因等は8月には後退すると見られ、長期的には香港ドル金利は米ドルベッグ制の下で徐々に安定し、低下する米ドル金利を追随するものと予想。

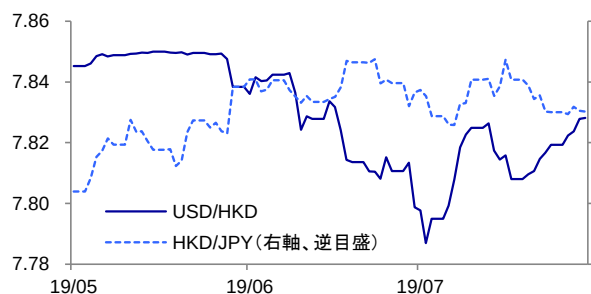
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における今月の国民的イベント』

8月の香港は祝日もなく、目立ったイベントはありません。直近では7月1日に、1997年より続く香港特別行政区樹立日があったほか、9月には早秋祭(日にちは太陽暦による)があります。お祭りの期間中、香港の人々は家族や友人と一緒に月餅を食べたり、月見をしたりと思いの時間を過ごすほか、子どもや若い世代にはランタン鑑賞も人気の一つです。

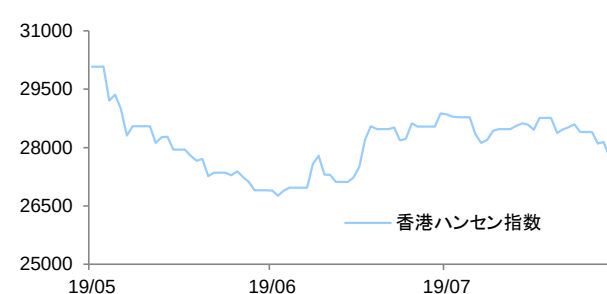
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
7/4	マーケット香港PMI
7/5	外貨準備高
7/18	失業率(季調済)
7/22	CPIコンボジット(前年比)
7/25	輸出(前年比)
7/25	輸入(前年比)
7/25	貿易収支(HKD)

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
6月	-	47.9	46.9
6月	-	\$445.6b	\$437.8b
6月	2.8%	2.8%	2.8%
6月	2.6%	3.3%	2.8%
6月	-2.3%	-9.0%	-2.4%
6月	-3.0%	-7.5%	-4.3%
6月	-49.1b	-55.2b	-34.7b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.7000	~	7.0000
	CNY/JPY	14.86	~	16.27
	100JPY/CNY	6.1500	~	6.7300

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 矢野 慧

■ 先月の為替相場

【為替相場】

7月のUSD/CNYは概ね6.8台後半で推移。
7月のUSD/CNYは6.80台中盤でオープン。6月末の米中首脳会談において、米国による対中制裁関税が見送りとなったことや、中国通信機器大手メーカーへの制裁緩和措置が発表されたことを受け、月初には人民元買いが進行。ドル人民元は一時6.84割れまでドル安人民元高が進行するも、その後は軟調な中国経済指標や李国強首相による金融緩和に関する発言等を背景に、元売りの動きが強まり、すぐに6.88付近まで戻している。その後は米雇用統計等、重要指標発表を控えて方向感なく推移。注目されていた米雇用統計が市場予想を上回る結果となったことで、一時的にドル買いが入ったものの、7月10日に米パウエルFRB議長の議長証言が控えていた事もあり、再び6.88付近で横ばい。米パウエルFRB議長の議会証言では、経済は堅調としながらも、依然予防的な調整余地があることを示したことで、ドル売りが進行。ドル人民元は6.86付近まで下落するも、一巡後には6.87付近まで反発。
その後、15日中国4-6月期GDPや中国重要経済指標の発表があり、比較的底堅い結果となったものの、相場への影響は限定的。月の後半まで6.88前後で上下する展開。

29日、米中通商協議を月末に控える中、米トランプ大統領が「中国は2020年大統領選まで通商合意を先送りする可能性がある」と言及すると、ドル人民元は直近のレンジを上抜け、6.89台中盤へ。その後は利益確定売りもあり、6.88台へ水準を下げる展開。

【金利相場】

月の前半、半期末要因の資金調達ニーズの剥落や資金市場の潤沢な流動性から資金市場の地合いは一段と緩和。ShiborO/N物は2009年以来の低水準で推移した。その後公開市場操作による資金吸収が続くと、ShiborO/N物が継続的に上昇するなど、動きが激しい展開。ターム物については、比較的安定して推移。

23日に期日到来したMLF5,020億元については、MLF2,000億元(1年物:3.30%)、TMLF2,977億元(1年物:3.15%)を合わせ、ほぼ同額でロールされた。

■ 今月の見通し

【為替相場】

7月末に6月末のG20における米中首脳会談以降、米中両国高官による、初の直接会合が行われているものの、特段の進展は見られそうにない。引き続き米中通商問題が熾り続けるものの、一方で米国が利下げを実施するなど、ドル売り圧力も残存すると見られる。更に中国の各種財政政策や金融政策を背景に、足許で経済指標が回復兆しを見せており、人民元のサポート材料となることが想定され、ドル人民元は上値重い推移が継続すると思われる。

【金利相場】

PBOCが必要に応じて資金供給オペを行い、資金市場の流動性は維持されると思われる。先月にはMLFの一部がTMLFに切り替わるなど、実質利下げも行われている。一部金融機関での資金繰り不安も騒がれる中、引き続き流動性供給や、TMLFへの借り換えなどを通じて、PBOCの緩和バイアスが強化されると見られており、PBOCの動向に要注目。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

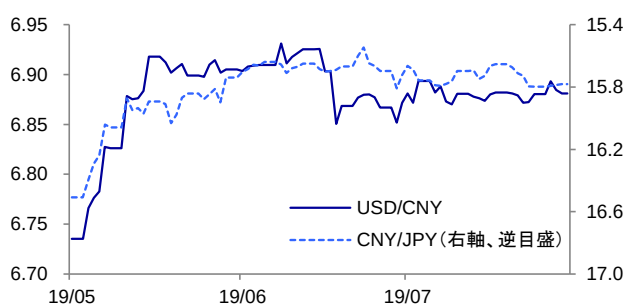
『当地における今月の国民的イベント』

8月の当地における国民的イベントは、旧暦の8月ではありますが、中秋節ではないでしょうか。中秋の名月を愛でる日であり、中国国内では重要な伝統行事。中秋節の丸い月は「団らん」を象徴し、中秋節を「団らん節」と呼ぶこともあり、「月餅」というお菓子を食べながら、一家団欒を楽しむ日です。「月餅」とは型に入れて作られた饅頭のような伝統菓子で、中には各種原料で作られた餡や塩漬したあひるの卵などが。中国国内では8月末から9月初めにかけて販売され、日頃お世話になっている人、仕事の取引先などに配ります。最近ではこの月餅を配る文化も変わってきていて、日持ちがするよう、月餅との引換券を渡したり、月餅ではなくチョコレートを渡すなんてケースも。相手もこの時期は沢山の月餅をもらうので、違う物があっても喜ばれるのかも知れません。

そんな中秋節の由来がロマンチックなので、ここで少しご紹介。『ある日、夫婦が仲睦まじく幸せに暮らしていました。ある時、夫は道士から飲めば天に上って仙人になれるという不老不死の薬を手に入れることに(唐突・・・)。夫は妻と離ればなれになりたくなかったので、その薬を飲まずに妻に預けました。その後、夫が出かけたスキに悪賢い男が不老不死の薬を手に入れようと盗みに入り、妻に薬を渡すよう迫りました。妻は薬を守るためにやむを得ずすべて飲んでしまい、月へ昇って行ってしまいました。夫が戻ると妻の姿が見えません。侍女から事の次第を聞いた夫が外に出てみると、月がいつもより一層丸く輝いて見えました。夫は庭に妻が好きだった果物を供え、妻を偲びました。この行事が毎年続き、世間にも伝わることに。そして8月15日が中秋であったことから、毎年中秋節としてお祭りするようになったということです。』妻を想う夫の気持ちや、より月を丸く美しく輝かせるのだから、良い話ですね。今年はこの物語を思い浮かべながら、中秋の名月を楽しみたいと思います。

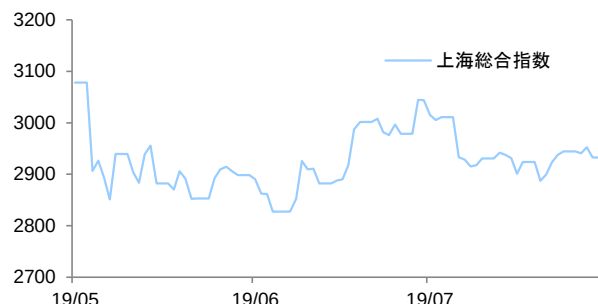
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/10	CPI(前年比)	6月	2.7%	2.7%	2.7%
7/10	PPI(前年比)	6月	0.2%	0.0%	0.6%
7/12	輸入(前年比、RMB建)	6月	3.7%	-0.4%	-2.5%
7/12	輸出(前年比、RMB建)	6月	6.9%	6.1%	7.7%
7/15	GDP(前年比)	2Q	6.2%	6.2%	6.4%
7/15	鉱工業生産(前年比)	6月	5.2%	6.3%	5.0%
7/15	小売売上高(前年比)	6月	8.5%	9.8%	8.6%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3550 ~ 1.3850
SGD/JPY 78.50 ~ 81.00

アジア・オセアニア資金部 前川 真也

■ 先月の為替相場

7月のシンガポールドル(SGD)相場は、上旬から中旬にかけて狭いレンジ内での推移。下旬以降は、7月FOMCでの50bp利下げ論が後退する中、USD買いSGD売りが徐々に強まる展開となった。

第1週、6月29日に行われた米中首脳会談で、5月以降停止していた通商協議を再開することで合意。中国の通信機器大手に対する禁輸措置を緩和する方針を表明したことを受けて、リスクセンチメントが大きく改善した。ドル買戻しが優勢となる中、SGDは1.35台前半から1.35台半ばまで上昇後、同水準でもみ合いとなった。

第2週、先週末5日に発表された米6月雇用統計が好調な結果となり、FRBの大幅な利下げへの期待が後退、ドルが買い戻される中、8日から9日にかけてSGDが下落する展開となった。10日、パウエルFRB議長の議会証言に注目が集まる中、議会証言で貿易摩擦や世界経済の減速による景気拡大への影響に対処するため、必要に応じて行動すると述べたことを受けて、7月FOMCでの利下げに向けた地均しとの見方が広がるとドルが売られ、SGDが1.35台後半まで上昇した。12日、星2QGDPが市場予想を大きく下回り、10年ぶりの低水準となったことから、SGDは1.36付近まで売られた。

第3週、15日中国2QGDPが市場予想とほぼ一致、中6月鉱工業生産と中6月小売売上高が市場予想を大幅に上回る良好な結果となったことからリスクオンとなり、SGD高となった。16日米6月小売売上高が良好な結果となったことから米景気減速不安が後退し、ドルが買い戻される中、SGDは軟調に推移。17日星6月非石油地場輸出が発表となり、市場予想対比大幅に減少。減少は4か月連続で輸出の不振が鮮明となり、SGDは売られた。18日クラリダFRB副議長のハト派的な発言をきっかけに米金利が低下するとドルが売られ、SGDが急伸する場面も見られた。

■ 今月の見通し

8月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGDの軟調推移を予想。

前月末に開催されたFOMC結果を受けて、急低下していた米長期金利の低下にも下げ止まりの兆しが見られる。このところ、米経済指標の結果も底堅い内容が続いており、追加利下げ幅も限定的な状況。引き続き、市場の注目は「米国の利下げ」から「米中貿易摩擦」へ次第に移る可能性が高い。

ファンダメンタルでは、7月に星2QGDP速報値が発表されたが、実績値前年比+0.1%と市場予想+1.1%を大きく下回り、10年ぶりの低水準に留まった。1Q実績値+1.1%からも急激に悪化、製造業の不振が足かせとなっている状況。過去2年間シンガポール経済をけん引してきた電子機器の生産は、6月に7か月連続で減少。また、6月の輸出実績値は、前年比-17.3%とここ3年余りで最大の落ち込みを記録した。シンガポール通商産業省(MTI)は、通年GDP見通しを前年比+0.5~1.5%に引き下げるとの見方が強まっている。今後を展望すると、成長率は低迷する見通しで、米中摩擦が深刻化していることに加え、米国経済の減速も予想されることから、当面輸出の伸び悩みが続くと考えられる。

上記の弱い2QGDP速報値の結果を受けて、シンガポール金融管理局(MAS)は次回10月の金融政策見直しで政策を緩和する可能性も浮上している。一部エコノミスト予想では、シンガポールドルの名目実効レート(NEER)の政策バンドの傾きを1.0%から0.5%に引き下げるとの見通しも強まっている。SGD高誘導ペースの引き下げ観測の高まりを背景に、SGDは当面は弱含みで推移する展開となろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における今月(8月)の国民的イベント』

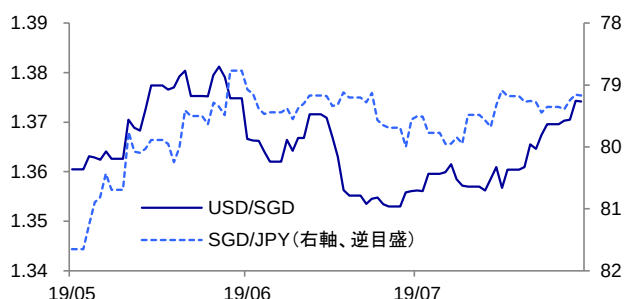
シンガポールが国を挙げて盛大にお祝いするビッグイベントの1つとして、8月9日(ナショナルデー)があります。1965年シンガポールがマレーシアから独立したことを記念する日で、毎年8月9日が近づくにつれ、街中が活気に溢れ、国内は徐々に国旗(赤と白)が色々などころに飾られ、街が埋め尽くされます。赤や白色の服を着た人もよく見かけ、不思議と愛国精神を感じる時期です。

2019年はシンガポールにとっても特別な年で、独立から54年目、シンガポール建国200周年の記念(英国人トーマス・スタンフォード・ラッフルズ上陸してから200年の節目)のメモリアルイヤーになります。少し余談になりますが、シンガポール創立200年を記念した新20ドル札が発行され、新たな札の表面には初代大統領であるYusof Ishak氏の肖像画、裏面にはシンガポール創立時のパイオニア8人が描かれており、それを求め長蛇の列ができ、数時間で完売となったそうです。

本題に戻りますと、8月9日には毎年、航空ショーや軍事パレード、マリナベイエリアでの花火と豪華なショーが繰り広げられ、お祝いムード一色になります。ナショナルデーは、シンガポールで最も大切な記念日にあたるので、準備も入念に行われ、リハーサルが実施されます。実は、密に6月頃からゲリラ的にリハーサルが実施されているようで、毎年ローカルのプロガーさんたちが情報を発信しているサイトもあるようです。今年は、本番前の7月27日と8月3日の2日がリハーサルの日程になり、リハーサルも本番とどこが違うのかと思うような完成度のようです。この時期に旅行や出張でご来星の機会がございましたら、是非シンガポールが挙げて盛大にお祝いするビッグイベントもお楽しみ下さい。(前川 真也)

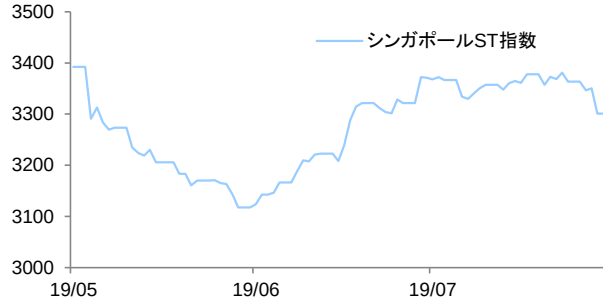
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	購買部景気指数	6月	49.8	49.6	49.9
7/12	GDP(前年比)	2Q	1.1%	0.1%	1.1%
7/12	小売売上高(前年比)	5月	-3.0%	-2.1%	-1.9%
7/17	非石油地場輸出(前年比)	6月	-9.6%	-17.3%	-16.3%
7/23	CPI(前年比)	6月	0.8%	0.6%	0.9%
7/26	鉱工業生産(前年比)	6月	-8.5%	-6.9%	-2.0%

タイバート相場

予想レンジ:

USD/THB 30.50 ~ 31.20
THB/JPY 3.45 ~ 3.55

バンコック資金室 井上 由貴

■ 先月の為替相場

○ドルバートは小幅に反発。

上旬、ドルバートは30.50の節目目前で反発。1日は30.60台後半で取引を開始したが、前週末に行われた米中首脳会談において米中通商会議の再開が決定されたことを受けて、週明けからリスクオンの展開となり、ドルバートは一時30.50台前半まで下落した。しかし節目の30.50を前にドルバートは反発、米金利が小幅に上昇したことに連れて30.60台後半まで戻した。その後は海外投資家からの資金流入を背景にバート買が優勢となったことや、米金利が低下する展開にドルバートはじり安の展開が続いた。5日は米6月雇用統計で非農業部門雇用者数が前月比224千人増と市場予想を大幅に上回ったことから、月末の米FOMCにおける50bp利下げ観測は後退し、ドルが急激に買い進まれ、ドルバートは30.80台前半まで急伸。週明けの8日以降、ウィラタイ中銀総裁が「リスクの増大に備え政策金利を調整し、バート高を和らげる手段を講じる用意がある」と発言したこと等、中銀がバート高に対処するとの思惑や、パウエルFRB議長の議会証言を前に30.80台前半で底堅く推移した。

中旬、中銀の外為規制強化発表を受けてドルバートは上昇。10日に行われたパウエルFRB議長の議会証言において、前週発表された堅調な内容の雇用統計を受けてもFRBの見通しに変更は無いと発言を受けてドルが急落、ドルバートも11日に再び30.50台後半まで下落。その後、12日にはタイ中銀が外為規制強化(非居住者がタイ国内に保有するTHB残高上限の引き下げ)が発表されると、ドルバートは一時31手前まで急伸。週明け15日以降も中銀規制強化が意識されドルバートは30.80-90近辺で小動きとなった。18日にはウィリアムズNY連銀総裁のハト派発言を受けてドルが急落するとドルバートも19日にかけて30.70台半ばまで下落するも、NY連銀が火消しに回ったことから反応は限定的で再び30.80台に戻した。

下旬、ドルバートは底堅く推移。22日、タイ商務省が6月通関ベース貿易額を発表し、輸出額が前年同月対比▲2.15%、輸入額が同▲9.44%と大幅に減少したことが示されるも反応は限定的。同日より、タイ中銀が12日に発表した外為規制が発効するも特別相場に混乱は見られず。一方で、12日の規制強化発表以降、債券市場を中心に海外投資家のフローは流出超となっており、ドルバートのサポートとなる形で30.80-90近辺で底堅く推移している。

■ 今月の見通し

○中銀によるバート高対策が意識され、ドルバートの下値は限定的か

FEDの利下げ観測を背景とした、タイ債券市場、株式市場への大幅な資金流入を背景に、6月以降はバート高が加速し、7月上旬には2013年6月以来の安値を更新する30.50近辺までドルバートは下落した。しかし、重要な節目である30.50を前に反発すると、タイ中銀のバート高抑制策の効果もあり現状は30台後半まで戻している。

タイ中銀は6月下旬以降、海外投資家からの投機的資金流入抑制を企図した施策を断続的に打ち出している。ひとつは短期債の発行額減額。そしてもうひとつは、7月12日に発表された外為規制の強化である。本規制強化は大きく2つに分かれており、7月22日より①非居住者がタイ国内に保有するTHB口座(NRBA, NRBS)の残高上限について、現状1非居住者あたりTHB300MioになっているものをTHB200Mioに減額する。②タイ国内で発行されたDebt Securitiesの非居住者による保有高の報告要件を強化する。の2点であり、投機的な資金流入に対してタイ中銀が断固として戦うという強いスタンスが感じられる。過去、2006年12月から2008年までバート高抑制のために実施されていた「30%資本規制」(外貨でバートを購入する際、資金の30%を中銀に信託することを義務づけていたもの)のような極端な策を講じるとまでは考えづらいが、今回の対策を以てしてでも一段とバート高が進行するようであれば二の手の手を講じてくる可能性は極めて高いだろう。

一方で、バート高対策の一つの手段とも考えられる利下げに関しては、慎重な姿勢であるように見える。前回6月26日に開催された金融政策委員会では、全会一致で政策金利1.75%の据え置きが決定されており、7月10日に公表された議事録においても、タイ経済の減速を認めながらも、依然として家計債務残高の膨張等、金融システムの不安定さに懸念を示しており、早々に利下げに舵を切るようには見えない。FEDをはじめとし、各国が利下げに踏み切っており、金利下げを行ったとしてもバート安効果が得られるかが不透明な中、カードは温存しておきたい、というのが中銀の本音か。

バート高急加速の背景に海外投資家の資金流入があるのは間違いないさそうであるが、大幅な経常黒字と、減速気味とはいえ確実な経済成長、政治的安定が揃っている限り、大きくバートが売り込まれる展開は予想しづらい。ただ、バート高が進行すれば中銀が動く、という思惑は以前にも増して高まりやすくなっており、ドルバートは下攻めしづらくなった印象。8月のドルバートは30台後半でのレンジ推移を予想する。

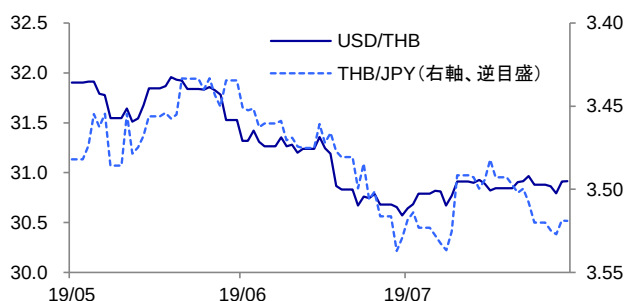
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における今月の国民的イベント』

8月12日はシリキット前王妃の誕生日にあたり、毎年タイではこの日が母の日として祝日となります。日本では母の日に贈る花の定番はカーネーションですが、タイではジャスミン。純白色で甘い香りが長く続くことから、ジャスミンは母の愛の象徴だそうです。素敵な話ですね。この時期になると、ジャスミンの価格が高騰するとか。(車に乗っているとおばさんが車窓越しに売りに来る花輪も値段が上がるみたいです)。また、母の日に向けてはシリキット前王妃がお産まれになった金曜日の色である「水色」を身に着けてお祝いしたり、前王妃や母への感謝を表す大規模なイベントも開催されます。レストランやショッピングセンターでは、「お母さんは無料」「お母さんは割引」等の様々なプロモーションが開催されます。日本はちょうどお盆休期中。家族でタイを訪れると、(お母さんに)特典があるかもしれませんね。

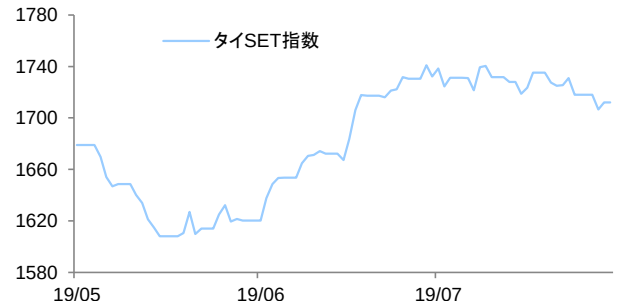
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	消費者物価指数(前年比)	6月	1.09%	0.87%	1.15%
7/1	CPIコア(前年比)	6月	0.51%	0.48%	0.54%
7/4	消費者景気信頼感指数	6月	-	63.4	64.8
7/31	輸出	6月	-	-2.1%	-7.2%
7/31	輸入	6月	-	-9.6%	-0.2%
7/31	貿易収支	6月	-	\$4401M	\$1403M
7/31	経常収支	6月	\$4727M	\$3923M	-\$376M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.0600	~	4.1450
	MYR/JPY	26.00	~	26.70
	JPY/MYR	3.7500	~	3.8500

マレーシアみずほ銀行 関上 伸一

■ 先月の為替相場

7月のUSD/MYRは、FRB要人発言による米利下げ期待感の高まりから、緩やかに下値を探る展開となった。

6月末の米中首脳会談での通商協議再開合意と華為制裁一部緩和を受け、月初にUSD/MYRは4.14台から4.12迄下落。しかし、5月貿易黒字幅はMYR9.1blnと4月対比では減少に転じ、特に対中輸出は▲2.2%y/yと米中摩擦に拠る需要減が見え隠れ。原油・石油製品輸出も前年比で▲20%程度に低下したことに加え、プレント価格もUS\$65/bbl以下に止まる中で、4.13台に押し戻される展開。5日発表の米6月非農業部門雇用者数が+241千人と市場予想(+116千人)を大きく上回り、月末米FOMCでの▲50bpの利下げ期待が減殺されると、USD/MYRは4.1450まで戻りを見せたが、振り返るとここが月中高値となった。

前回5月会合で▲25bpの予防的利下げに踏み切った中銀は、10日政策決定会合でオーバーナイト政策金利(OPR)を3.00%に据置き。声明で、通商摩擦の不確実性と商品市況の弱地合の継続をリスク要因として指摘も、国内需要の高位安定から成長率には自信を示す。翻って米国では、下院議会証言でのパウエル議長の「6月雇用統計の強さにも政策スタンスは影響を受けない」との趣旨の質疑にUSD安地合が加速。

中旬に発表された6月の中国鉱工業生産指数/小売売上高が予想以上の強さとなったことが世界経済減速懸念を幾分和らげる中、18日にはNY連銀ウィリアム総裁も「FRBは火薬を乾いたまま放置する(潜在的な経済問題が実体化することを見逃す)余裕は無い」と発言。この嚇しは観面に効いて、USD/MYRは4月中旬以来となる4.1060を示現した。

下旬はFOMC睨みで幅幅がタイトとなる中、第二四半期GDPや個人消費など予想比良好な米経済指標が大幅利下げの見通しを幾分薄めた格好。USD/MYRも僅かながら反発して、4.12レベルで月末週を迎えている。

■ 今月の見通し

8月のUSD/MYRは4.06—4.13レンジでの推移を予想。米国利下げ効果がエマージング市場に活力を与えることに加え、海外投資家フローの流入期待感がMYRを下支えする展開が予想される。

米国が金融緩和スタンスを明確化して以降、一部のアジア諸国で米利下げを先取りする形での利下げの動きが見られている。ファンダメンタルズの改善期待から新興国通貨も堅調さを取り戻した。マレーシア中銀は5月会合で予防的な利下げを行い、直近の7月9日会合では政策金利を据置いた。そもそも米利上げ局面でも周辺のアジア諸国と異なり通貨防衛目的での利上げは実施していないことから、年内は政策金利を据置く可能性が高く、米金利とのコントラストをなしそうだ。

マレーシア政府は2018年の財政および政府債務状況を17日に国会に報告したが、これを受けてFitch等格付機関は、政府の財政健全化の取組みに一定の評価を与え、Aマイナスのソブリン格付をコンファームした。国内株式市場は足元軟調ながら、債券市場での海外投資家の資本フローは6月に流入に転じ、7月も良好と見られる。FTSEインデックス問題は依然燦るが、安定的に推移すると予想。

また政府は6月末に、2020年政府予算を10月11日に発表することをアナウンス。財務相は新税導入は行わないことを明言しているが、19年度の財政赤字対GDP目標:▲3.4%達成に自信を示す一方、20年度:▲3.0%は困難になる可能性を含ませる。昨年は具体化できなかった海外企業向けの進出インセンティブに踏みきれば、これまで認可額が積みあがっているFDIの実弾の引き金を引く可能性も高い。

足元は一部の米国の電機・電子系企業や中国の紙関連製造業の進出計画が政府からも実名で公表されているが、これらの海外企業による直投フローもMYR買い圧力の一因となる可能性が存在しているため、留意が必要だ。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地における今月の国民的イベント』

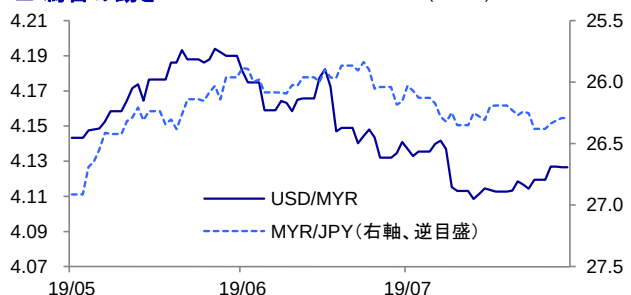
このレポートを皆様ご覧になる時には「先月」のイベントになってしまっており恐縮だが、7月30日がマレーシア新国王(アゴン)の戴冠式(Coronation)だった。パハン州のスルタン、アブドゥラ・スルタン・アーマド・シャー国王がマレーシア第16代のアゴンに即位したのは本年1月31日だが、7月1日に30日の戴冠式と祝日化が発表。今上天皇の即位の礼(10月22日)が昨年暮れに決定されていたのと比べると、やや急なスケジュールでの設定となった。

マレーシアは13の州と3つの連邦直轄領からなり、君主が存在する9つの州のスルタンの互選により任期5年の国王が決定される選挙王制だが、実質的に輪番となっている。2016年暮れに即位したクランタン州スルタンのムハンマド5世前国王が2年の任期を残して今年初に突然辞任を発表。過去には在任中の逝去により任期を満了しなかった例はあるが、「生前中途退位」となったのは初めてだ。退位の背景は明言されていないが、ふた回り年齢離れた元ミス・モスクワのロシア人女性との結婚が一因との憶測が流れている。過去クランタン州の次に互選されているパハン州のスルタン:アーマド・シャー第7代国王は、前国王の退位表明時に既に88歳。その翌週にスルタンの座を息子のアブドゥラ氏に譲り、同氏が新国王に互選された。父のアーマド元国王はこれを見届け、5月に永眠した。

ところがドラマは此処までではなかった。翌々週に戴冠式を控えた7月16日、前国王のロシア人夫人との離婚が電撃的に報道されている。

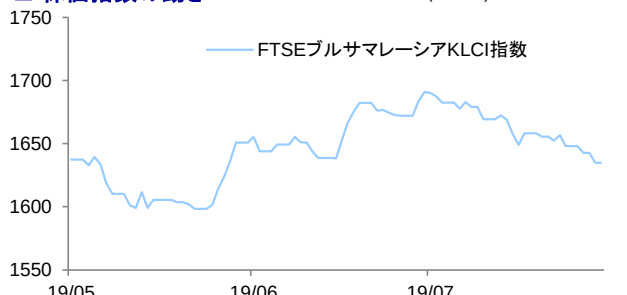
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/4	Trade Balance (MYR)	May	8.3B	9.1B	10.9B
7/4	Exports	May	2.2%	2.5%	1.1%
7/4	Imports	May	3.2%	1.4%	4.4%
7/5	Foreign Reserves	28-Jun	-	102.7B	102.6B
7/9	Policy Rate(OPR)	9-Jul	-	3.00%	3.00%
7/12	Industrial Output y/y	May	3.50%	4.00%	4.00%
7/22	Foreign Reserves	15-Jul	-	103.3B	102.7B
7/24	CPI y/y	Jun	1.5%	1.5%	0.2%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13900 ~ 14300
 IDR/JPY 0.76 ~ 0.79
 JPY/IDR 126.58 ~ 131.57

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 田才 雄

■ 先月の為替相場

7月のドルルピアは、一時13900を割り込む等、ルピアは堅調推移となった。

ドルルピアは1日、14000台後半でオープン。この日発表されたインドネシア6月CPIは前年同月比3.28%となった。米中貿易戦争に対する懸念が燃る中、月序盤は月中の安値水準となる14100台半ばまでルピアは下落。だが、その後は5日に発表された当国の6月末時点での外貨準備高が前月から35億ドル増加したこともあり、14100台前半でルピアは底堅く推移。また、同日発表された米6月雇用統計は良好な結果となるも、翌週8日のルピアの下落幅は限定的に留まった。

方向感が出難い時間が続いたが、月中旬の12日、ジョコウィ大統領が海外からの投資の活発化を狙い、法人税引下げを検討しているとの発言があったことから、ドルルピアは14000近辺まで下落。翌週15日も海外投資家からの資金流入が強まる中、一時13900を割込むまでルピア高が進行した。米金利の低下局面に調整が入る中、14000近辺までドルルピアも反発する場面も見られたが、ルピアが底堅く推移する中、18日のインドネシア中銀定例会合で政策金利である7日物リバースレポ金利を市場予想通り0.25%引き下げ5.75%とする、2017年9月以来の利下げに踏み切った。既に織り込み済みであったこともあり、ルピア安幅は限定的となった。寧ろ、翌日19日は、利下げや原油価格の下落を好感したインドネシア株への資金流入によりルピアも再び13900を割込む等、堅調に推移した。

月下旬はインドネシアへの資金流入が続いたことの調整や、月末に向けたインドネシア国内輸入企業によるドル買いルピア売りの実需フローによって、ドルルピアは14000台まで反発。FOMCを控える中、14000台前半での推移が継続して月内の取引を終えた。(7月31日現在、終値ベース)

■ 今月の見通し

8月のドルルピアは底堅い推移(ルピアの上値重い推移)を予想する。

ルピアを取り巻く国内環境についての基本認識は不変。4月分インドネシア貿易収支が巨額の貿易赤字を記録後、5月、6月分についてはともに小幅な貿易黒字に留まった。振るわない輸出を輸入減少分で補った構造で、振わない中国向けの石炭やパーム油等、資源輸出は今後も冴えないことが予想される。大きなマイナス計上が続く所得収支を貿易収支がファイナンスすることはやはり難しい状況であり、慢性的な経常赤字が今後も継続するであろうことに鑑みれば、ルピア安に回帰していくことが予想される。

加えて、これまで新興国への資金流入を支えてきた米利下げ期待だが、過度な期待は修正を迫られる可能性が高まってきた。7月末のFOMCでは、利下げが決定されるも、パウエルFRB議長により、あくまでも予防的利下げであることが強調された。利下げサイクル入りの可能性も含め、残り何回の利下げになるのかは引き続き注視が必要だが、7月末のFOMC結果を鑑みると、6月、7月と続いていた海外投資家からの資金流入によりルピアが支えられていた構図が、8月も続くことは難しそうである。

一方で、先月凡そ2年振りに利下げに踏み切ったインドネシア中銀だが、更なる利下げ余地があるとすると、追加利下げの余地を残している。だが、米利下げ動向次第な部分があり、ルピアの安定した推移も必要であろう。少なくともルピア安を加速させる格好での利下げは回避されるのではないかと。

米利下げ期待が後退する可能性、海外投資家による新興国買い疲れ、懸念が燃る中東情勢や米中貿易戦争の行方を鑑みれば、ルピア相場は盤石ではない。8月のドルルピアは底堅く推移しそうである。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地における今月の国民的イベント』
 毎年8月に入ると、いつもより国旗を良く見られるようになったのは、8月17日はインドネシアの独立記念日だからです。

独立記念日の約1ヶ月前になると、旗やのぼりがたくさん道沿いに飾られます。各家庭でも国旗を掲揚し、インドネシア国旗の色である赤と白のカラーリングの様々な旗がはためく光景が見られます。

学校や住宅地などでは独立記念日の前後に、子供から大人までのために、さまざまなイベントや大会が開催されます。代表的なものを以下の通り紹介します。

・バンジャット・ピナン(木登り競争): 油が塗られ、登りにくした木の棒に登り、先端に景品が下げられており、それを争奪するというもの。数人が一気に景品を奪い合ったり、仲間と協力し合って登り景品を手に入れたり、その競技法は様々です。

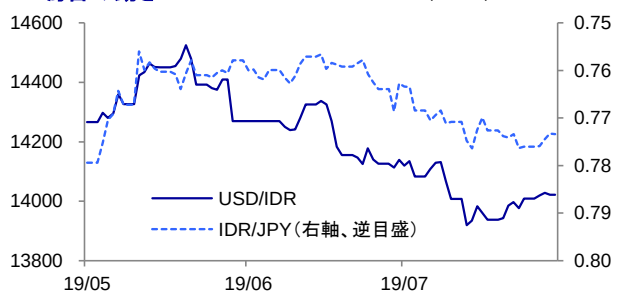
・クルブック(せんべい)食い競争: 主にこどもが参加するのですが、釣り下がっているクルブック(せんべい)を手は使わないで食べつくします。一番早く食べ終わった人が勝利。

・男性のナシゴレン料理大会: 普段料理しないお父さんたちは、調味料も知らずに、レシピなしでナシゴレンを作る大会です。意外と面白いです。

・綱引: 運動会でもよくある綱引き、子供から大人までその年齢層は幅広く、チームの人数もさまざま。(インドネシアみずほ銀行 資金為替課 アストリド)

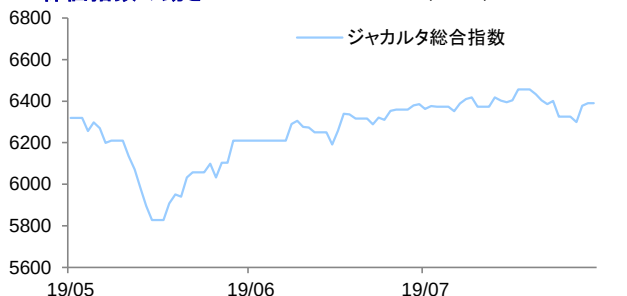
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	CPI(前年同月比)	6月	3.20%	3.28%	3.32%
7/5	外貨準備高(USD B)	6月	-	123.8	120.4
7/15	貿易収支(USD M)	6月	658	196	219
7/15	輸出(前年比)	6月	-6.75%	-8.98%	-8.48%
7/18	BI 7daysリバースレポ金利		5.75%	5.75%	6.00%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 50.20 ~ 51.50
PHP/JPY 2.125 ~ 2.145

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

7月のドルペソ為替相場(オンショア)は、1米ドル=51.23ペソで取引開始。6月末に行われた米中首脳会談、米朝首脳会談で市場心理は大きく改善したことでペソ高が進み、1日の終値は昨年1月26日以来のペソ高水準である1米ドル=51.05ペソ。

米金利の先安観もあり2日には1米ドル=51ペソで取引される場面もあったが、フィリピン中銀の介入警戒感もあり、1米ドル=51ペソ丁度はサポートされ、5日に発表される米6月雇用統計を前にしてドルの買い戻しも入り、1米ドル=51ペソ前半でもみ合いに。

米雇用統計後は過度な米金利先安観後退で10日には、一時1米ドル=51.48ペソ(これが7月のドル高値に)までドルが買い戻された。しかしながらフィリピン統計庁が発表した比5月貿易収支が32.8億ドルの赤字となり、前月の34.7億ドル、市場予想の37.4億ドルから縮小したことでドルの上値の重さが確認され、パウエルFRB議長の議会証言でFOMCでの利下げ観測が高まると、雇用統計後のドル買い地合は一転。

15日に発表された中国の良好な経済指標や、比5月OFW送金金額が前年同月比5.7%増の26.1億ドルと市場予想(25.4億ドル)、前月(24.4億ドル)を上回ったこと、また前年同月を9ヶ月連続で上回ったことが材料視され、16日には心理的な節目となる1米ドル=51ペソ丁度を割り込んで1米ドル=50.88ペソで取引された。

その後は米金利の先行きに売買交錯、FOMCを前にして1米ドル=51ペソ台に戻すこともあったが、7月31日10時現在、1米ドル=50.80-90ペソレベルでの取引に。

■ 今月の見通し

米ドル政策金利の過度な利下げ期待が剥落したあと、ドルペソ為替相場はドルの戻りが限定的で、ドルの上値は重かった、というのが7月半ばから後半にかけての印象。8月も引き続き米金利の動向が意識される展開となろう。

世界経済にネガティブな見方が台頭する中、実態経済の先行き不安からリスクオフ地合でドル高ペソ安が進むとみていたが、世界的な金融緩和の動きが広がり、各国の金融当局が景気下支えすることで株価が支えられている。斯かる状況が続けばペソの堅調地合は続きそうだ。

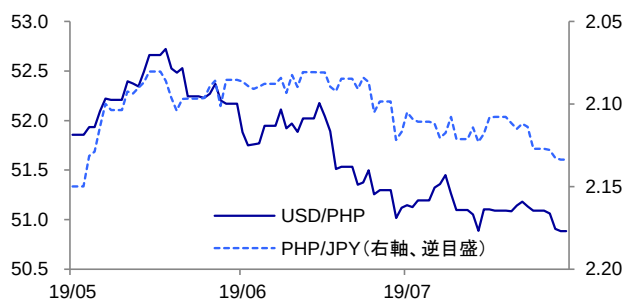
フィリピンの6月消費者物価指数は前年同月比2.7%の上昇となり、市場予想2.8%、前月の3.2%から減速して1年10カ月ぶりの低水準となった。フィリピン中銀ジョクノ総裁は19年第3四半期のインフレ率が2%を切る可能性に言及した。

フィリピンにおいても金融政策は緩和的とみる市場参加者は多いものの、金融政策に関わる当局者からは、8日に開催予定の金融政策委員会でのペソ政策金利引き下げ(※)に慎重なコメントが聞かれる。ペソの金融政策が現状維持となればペソ高材料になりそう。

※政策金利が据え置かれても金融機関に義務付けられる準備預金比率の変更で金融緩和が実施される可能性あり。

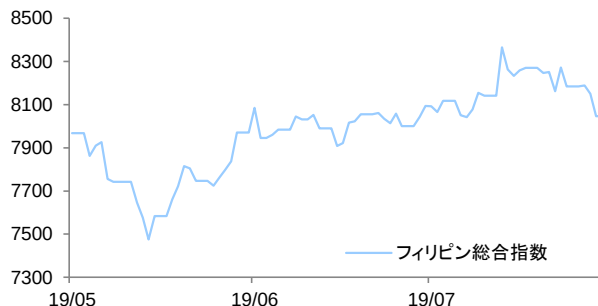
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 67.00 ~ 71.00
INR/JPY 1.55 ~ 1.61

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【7月の米ドル/インドルピーは狭いレンジでの推移だった】

68.93で月初取引を開始。一週目は企業買収絡みの大口のルピー買いが聞かれたほか、インド政府が外債発行を検討とのヘッドラインにドル/ルピーは下押しされる展開。また原油価格も下値を切り上げる中ルピーにとっては売り材料に。その後注目されていたパウエルFRB議長の議会証言にて0.25%の利下げ再度容認するような発言が確認されると、米債利回りが低下する中、ドル/ルピーは当月の安値となる68.27まで下落した。

その後は事前予想比良好な結果となった米物価指標にドルの買戻しが入った他、16日のルピー市場クローズ後に発表された米小売売上高が物価に続き良好な結果となると一段とドルに資金が集中、ドル/ルピーも69を回復する動きに。

26日の寄付きでは当月高値となる69.14を示現するも、先般の予算案と共に発表されていたインド政府による外債発行についてPMO(Prime Minister Office)が否定的なコメントをリリースし、これを財務大臣が否定する等の応酬の中、ドル/ルピーも振られ、30日執筆時点で68.84レベルでの推移となっている。7月を通して上下わずか87パイサの値幅だった。

【7月のインドルピー/日本円は水準を切り上げた展開だった】

1.567レベルで当月オープン。月初107円半ばにいたドル/円が良好な米雇用統計を受けて109円目前まで上伸。円安主導でルピー/円は当月高値となる1.59まで水準を切り上げる。ただし、その後は上述のパウエルFRB議長の議会証言で「良好な雇用統計の結果を受けても(利下げするという)見通しは変わらない」との発言にドル/円は急落。また、イランの偵察機を米軍が撃墜とのヘッドラインに円選好が急激に強まり、ドル/円が107円前半まで急落すると、ルピー/円も当月の安値となる1.556まで円高が進行。

■ 今月の見通し

【8月の米ドル/インドルピーは方向感を欠く展開を予想】

今月はインド中銀の政策会合(Monetary Policy Committee)が予定されている。0.25%の利下げについては市場に織り込み済みであり、市場参加者の焦点はこの先の政策金利動向である。具体的には、6月MPCでNeutral(利上げ・据え置き・利下げを検討)からAccommodative(据え置き・利下げを検討)へ変更された政策スタンスが再びNeutralに戻るかどうか、ということになるだろう。

今年に入り既に3回の利下げを行い、8月にあるであろう利下げは4回目にあたり、合計で1.00%も利下げされている。一方で、家計部門を見れば住宅価格、企業部門では設備稼働率は底堅さを見せている。物価は緩やかに上昇基調であり、またインド中銀のGDPの年度見通しは7.00%となっていることから、真っ当に考えれば4回の利下げで打ち止めという予想になろう。しかしながら、昨年12月にはパテル中銀前総裁の辞任、併せて、2月と4月の会合で利下げに反対していたアチャル副議長も6月末に辞任となっている。公式には認められていないが政府との軋轢が背景にある、というのが市場の予想だ。こういったことを考えると、政府から強い圧力をかけられるかたちで5回目の利下げを示唆するシナリオも考えられなくはない。アメリカと同じくインドも「中央銀行の独立性」が危ぶまれる。

併せて為替市場に影響を与えている外貨建て国債発行の問題。これについて詳細はアナウンスされていないものの、コンセンサスは「為替ヘッジなし」となっており、外債発行で得た外貨をルピーに転じるためルピー高要因となる。既述のように本件についてPMOが反対意見を提示し、その後財務大臣が火消しに走った。これに合わせて為替はルピー安→ルピー高という反応が見られた。ただ、PMOは何故外債に反対しているか、その理由すら発表されておらず予測ができないというのが正直なところ。

政策金利の予想と併せて、インドのファンダメンタルの状況云々というよりも「政府与党がなんと言うか」、といった要因が濃くなってきているようにも見え、ルピーの予想を難しくしている。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地における今月の国民的イベント』

●印の日は固定、○は毎年日付が変わります。
○8月12日 Eid al-Adha (イスラム教犠牲祭)
イスラム教の祝日。アブラハムが息子を全能の神アッラーへの犠牲として捧げた事を記念し、インドではヤギを生贄に祝う。

●8月15日独立記念日: インド全土で祝日。国旗掲揚、国歌斉唱の儀式が各地で盛大に行われる。

○8月15日 Raksha Bandhan (兄弟・姉妹の日)
「ラキ」という紐を姉妹と兄弟の手首に結び絆を強める。

●8月17日 Parsi New Year (パールシー(ゾロアスター教)新年)

イランのイスラム支配から追われるようにしてインドに辿り着き、以来独自の文化と伝統を守り抜いて暮らすパールシー(インドに住むゾロアスター教徒)たちが、この1年の健康と富、繁栄を祈る日。

○8月24日 Janmashtami (クリシュナ神生誕祭)

ヒンドゥー教のクリシュナ神の誕生を祝う祭りで、人々はクリシュナ神をたたえる歌と踊りを披露する。

○8月25日 Dahi Handi

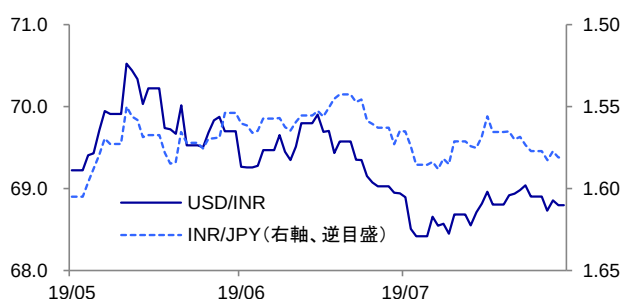
クリシュナの誕生日の次の日に行われる祭りで、空中につるされた壺(中にはクリシュナ神の好きな塩バター牛乳が入っている)を割るために、ヒンドゥー教の信者らが巨大な人間ピラミッドを組んで壺割り競争を競う。

8月が終わると毎日雨ばかりのモンスーンの湿気から少しずつ解放され、9月 Ganesh Chaturthi (ヒンドゥー教の神ガネーシャの祭)、10月 Dussehra (女神ドゥルガーの祭)、10月末 Diwali (ヒンドゥー教の新年祭)とお祭り騒ぎが続きます。祝いごとは宗教的行事のため、日本総領事館から注意喚起が発出されることもしばしばですので、お気をつけください。

(インド営業部ムンバイ 渡辺昌枝)

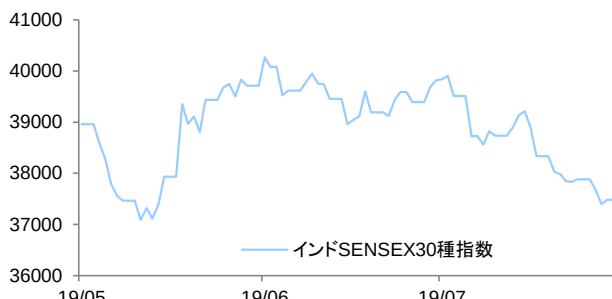
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/1	製造業PMI	6月	-	52.1	52.7
7/12	消費者物価指数	6月	3.13%	3.18%	3.05%
7/12	鉱工業生産	5月	2.9%	3.1%	3.4%
7/15	貿易収支	6月	-150億ドル	-153億ドル	-154億ドル

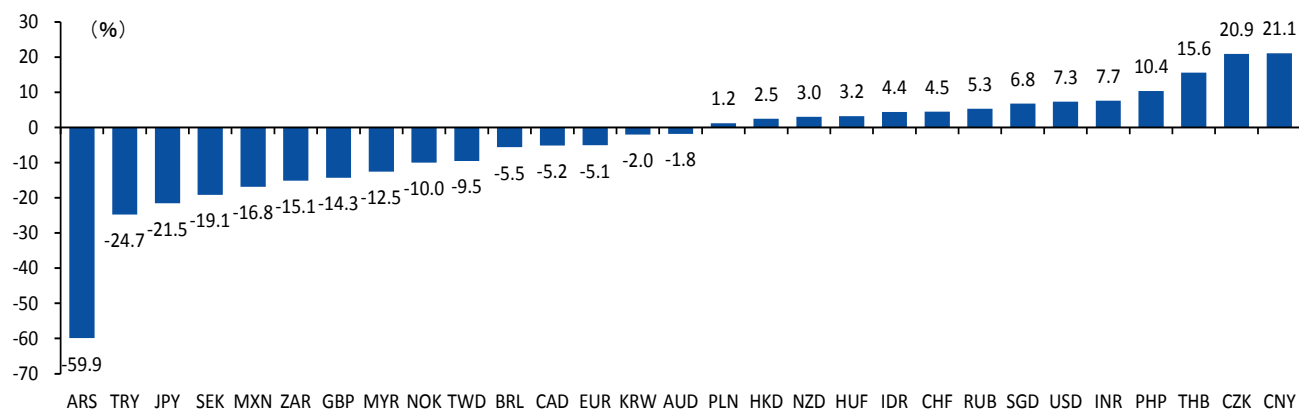
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2018年末	2019年7月末	騰落率	株式市場	2018年末	2019年7月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	23327.46	26864.27	15.2%	-
日本	USD/JPY	109.69	108.78	-0.8%	日経平均株価	20014.77	21521.53	7.5%	8.4%
ユーロ圏	EUR/USD	1.1467	1.1076	-3.4%	ドイツDAX指数	10558.96	12189.04	15.4%	15.4%
英国	GBP/USD	1.2754	1.2159	-4.7%	ロンドンFTSE100指数	6728.13	7586.78	12.8%	18.3%
豪州	AUD/USD	0.7049	0.6845	-2.9%	S&P/ASX200指数	5646.4	6812.56	20.7%	24.2%
カナダ	USD/CAD	1.3637	1.3191	-3.3%	S&Pトント総合指数	14322.86	16406.56	14.5%	18.4%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.8785	6.8811	0.0%	上海総合	2493.896	2932.506	17.6%	17.5%
香港	USD/HKD	7.8319	7.8279	-0.1%	香港ハンセン	25845.7	27777.75	7.5%	7.5%
インド	USD/INR	69.7675	68.7975	-1.4%	インドSENSEX30種	36068.33	37481.12	3.9%	5.4%
インドネシア	USD/IDR	14390	14022	-2.6%	ジャカルタ総合	6194.498	6390.505	3.2%	5.9%
韓国	USD/KRW	1110.95	1183.01	6.5%	韓国総合株価	2041.04	2024.55	-0.8%	-6.8%
マレーシア	USD/MYR	4.1335	4.1265	-0.2%	ブルサマレーシアKLCI	1690.58	1634.87	-3.3%	-3.1%
フィリピン	USD/PHP	52.556	50.885	-3.2%	フィリピン総合	7466.02	8045.8	7.8%	11.3%
シンガポール	USD/SGD	1.3629	1.3743	0.8%	シンガポールST	3068.76	3300.75	7.6%	6.7%
台湾	USD/TWD	30.549	31.097	1.8%	台湾加権	9727.41	10823.81	11.3%	9.3%
タイ	USD/THB	32.327	30.91	-4.4%	タイSET	1563.88	1711.97	9.5%	14.5%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2019年6月時点)



■ 実質GDP成長率

	2017Q4	2018Q1	2018Q2	2018Q3	2018Q4	2019Q1	2019Q2	2017	2018
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	3.5	2.5	3.5	2.9	1.1	3.1	2.1	2.4	2.9
日本*	1.3	-0.4	2.3	-2.6	1.8	2.2		1.9	0.8
ユーロ圏	2.8	2.5	2.2	1.7	1.2	1.2	1.1	2.4	1.9
英国	1.6	1.2	1.4	1.6	1.4	1.8		1.8	1.4
豪州	2.4	3.1	3.1	2.8	2.4	1.8		2.4	2.9
カナダ*	1.7	1.5	2.5	2.1	0.3	0.4		3.0	1.9
エマージングアジア									
中国	6.7	6.8	6.7	6.5	6.4	6.4	6.2	6.8	6.6
香港	3.5	4.6	3.6	2.8	1.2	0.6	0.6	3.8	3.0
インド	7.7	8.1	8.0	7.0	6.6	5.8		8.2	7.2
インドネシア	5.2	5.1	5.3	5.2	5.2	5.1		5.1	5.2
韓国	2.8	2.8	2.9	2.1	2.9	1.7	2.1	3.2	2.7
マレーシア	5.7	5.3	4.5	4.4	4.7	4.5		5.7	4.7
フィリピン	6.6	6.5	6.2	6.0	6.3	5.6		6.7	6.2
シンガポール	3.6	4.6	4.2	2.6	1.3	1.1	0.1	3.7	3.2
台湾	3.5	3.2	3.3	2.4	1.8	1.7	2.4	3.1	2.6
タイ	4.0	5.0	4.7	3.2	3.6	2.8		4.0	4.1

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	18/11	18/12	19/01	19/02	19/03	19/04	19/05	19/06	2017	2018
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.7	3.9	4.0	3.8	3.8	3.6	3.6	3.7	4.4	3.9
日本	2.5	2.4	2.5	2.3	2.5	2.4	2.4	2.3	2.8	2.4
ユーロ圏	7.9	7.9	7.8	7.8	7.7	7.6	7.6	7.5	9.1	8.2
英国	4.0	4.0	3.9	3.9	3.8	3.8	3.8		4.4	4.1
豪州	5.1	5.0	5.1	4.9	5.1	5.2	5.2	5.2	5.6	5.3
カナダ	5.6	5.6	5.8	5.8	5.8	5.7	5.4	5.5	6.3	5.8
エマージングアジア										
中国		3.8			3.7				3.9	3.8
香港	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	3.2	2.8
インドネシア				5.0					5.4	5.2
韓国	3.8	3.8	4.4	3.7	3.8	4.1	4.0	4.0	3.7	3.8
マレーシア	3.3	3.3	3.3	3.3	3.4	3.4	3.3		3.4	3.3
フィリピン			5.2			5.1			5.7	5.3
シンガポール		2.2			2.2				2.2	2.1
台湾	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.8	3.7	3.8	3.7
タイ	1.0	0.9	1.0	0.8	0.9	1.0	1.1	0.9	1.2	1.1

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	18/12	19/01	19/02	19/03	19/04	19/05	19/06	19/07	2017	2018
	(前年比%)								(前年比%)	
先進国										
米国	1.9	1.6	1.5	1.9	2.0	1.8	1.6		2.1	2.4
日本	0.3	0.2	0.2	0.5	0.9	0.7	0.7		0.5	1.0
ユーロ圏	1.5	1.4	1.5	1.4	1.7	1.2	1.3	1.1	1.5	1.8
英国	2.1	1.8	1.9	1.9	2.1	2.0	2.0		2.7	2.5
豪州	1.8			1.3					1.9	1.9
カナダ	2.0	1.4	1.5	1.9	2.0	2.4	2.0		1.6	2.3
エマージングアジア										
中国	1.9	1.7	1.5	2.3	2.5	2.7	2.7		1.6	2.1
香港	2.5	2.4	2.1	2.1	2.9	2.8	3.3		1.5	2.4
インド	2.1	2.0	2.6	2.9	3.0	3.1	3.2		3.3	4.0
インドネシア	3.1	2.8	2.6	2.5	2.8	3.3	3.3		3.8	3.2
韓国	1.3	0.8	0.5	0.4	0.6	0.7	0.7	0.6	1.9	1.5
マレーシア	0.2	-0.7	-0.4	0.2	0.2	0.2	1.5		3.9	1.0
フィリピン	5.1	4.4	3.8	3.3	3.0	3.2	2.7		3.2	5.1
シンガポール	0.5	0.4	0.5	0.6	0.8	0.9	0.6		0.6	0.4
台湾	-0.1	0.2	0.2	0.6	0.7	0.9	0.9		0.6	1.4
タイ	0.4	0.3	0.7	1.2	1.2	1.2	0.9		0.7	1.1

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2017Q3	2017Q4	2019Q1	2018Q2	2018Q3	2018Q4	2018Q1	2017	2018
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.3	-2.3	-2.3	-2.2	-2.2	-2.4	-2.4	-2.3	-2.4
日本	4.2	4.2	4.1	4.1	3.8	3.5	3.5	4.2	3.5
ユーロ圏	3.1	3.2	3.3	3.4	3.1	2.9	2.8	3.2	2.9
英国	-3.6	-3.3	-3.4	-3.2	-3.5	-3.9	-4.4	-3.3	-3.9
豪州	-2.1	-2.6	-2.7	-2.7	-2.6	-2.0	-1.6	-2.6	-2.0
カナダ	-2.6	-2.8	-2.9	-3.0	-2.6	-2.6	-2.7	-2.8	-2.6
エマージングアジア									
中国	1.2	1.6	1.1	0.7	0.5	0.4	1.0	1.6	0.4
香港	4.8	4.7	4.5	4.1	3.7	4.3	4.9	4.7	4.3
インド	-1.4	-1.5	-1.8	-1.9	-2.3	-2.5	-2.1	-1.5	-2.5
インドネシア	-1.3	-1.6	-1.9	-2.3	-2.8	-3.1	-3.1	-1.6	-3.0
韓国	5.0	4.6	4.3	4.4	4.4	4.5	4.5	4.6	4.5
マレーシア	3.0	3.0	3.7	3.2	2.6	2.3	2.4	3.0	2.3
フィリピン	-0.1	-0.8	-0.6	-1.7	-2.7	-2.4	-2.6	-0.8	-2.4
シンガポール	17.0	16.4	16.4	17.2	17.7	17.9	17.7	16.4	17.9
台湾	13.4	14.4	14.6	14.5	13.3	12.2	11.4	14.4	12.2
タイ	9.7	9.7	9.4	9.1	7.2	6.4	5.9	9.7	6.4

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	2.00-2.25	緩和: 2019/7/31	2.25-2.50	2019/7/31	-25bp	2019/7/31	-25bp
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10bp	2019/7/30	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5bp	2019/7/25	現状維持
英国	バンク・レート	0.75	引き締め: 2017/11/2	0.25	2018/8/2	+25bp	2019/6/20	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.00	緩和: 2011/11/1	4.75	2019/7/2	-25bp	2019/7/2	-25bp
カナダ	翌日物金利	1.75	引き締め: 2017/7/12	0.50	2018/10/24	+25bp	2019/7/10	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25bp	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レポ金利	5.75	緩和: 2019/2/7	6.50	2019/4/2	-25bp	2019/6/6	-25bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	5.75	緩和: 2019/7/18	6.00	2019/7/18	-25bp	2019/7/18	-25bp
韓国	7日物レポ金利	1.50	緩和: 2019/7/18	1.75	2019/7/18	-25bp	2019/5/31	-25bp
マレーシア	翌日物金利	3.00	緩和: 2019/5/7	3.25	2019/5/7	-25bp	2019/7/9	現状維持
フィリピン	翌日物金利	4.50	緩和: 2019/5/9	4.75	2019/5/9	-25bp	2019/6/20	現状維持
台湾	再割引金利(公定歩合)	1.375	緩和: 2015/9/24	1.875	2016/3/23	-12.5bp	2016/9/29	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	1.75	引き締め: 2018/12/19	1.50	2018/12/19	+25bp	2019/6/26	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.25	緩和: 2012/3/12	15.00	2017/7/7	-25bp	2017/7/7	-25bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行